

263
367

小學
に現はれたる
樹木、木材、森林、林業、
山に關する事項

263-367



1200501351301



始



小學校教科書に現はれたる

樹木・木材・森林・林業・山

に關する事項

社団法人

大日本山林會

東京・赤坂・溜池
電話赤坂側一六七番

尋常小學讀本

(自卷一——至卷十二)

●尋常小學讀本 卷一 (第一學年兒童用)

一頁—十頁
 コマ。カラカサ。マツ。シカ。シカノツノ。サル。
 カキノタネ。

十一頁—二十頁
 ハサミト。モノサシ。クシトカガミ。ナシトミカン。ウ
 サギ。タケニスズメ。ヤナギニツバメ。ホバシラ。
 キリノゴモン。タカイスキノキ。フデ。

二十一頁—三十一頁
 ヒバチ。タバコボン。モリノナカニオミヤガ
 アリマス。アカイトリキガミエマス。モノホシザラ。
 カゲタルマ。ミツタルマ。

三十一頁—四十三頁
 タケヤブ。トビグチ。ハシゴ。ナギナタ。
 六十頁—六十一頁
 カツバ。ジャノメノカサ。

●尋常小學讀本 卷二 (第一學年兒童用)

三 カトウキヨマサ
 ヤリ(五頁)

九 木ノハ

カセガフイテ、イロイロナ木ノハガトシテキマス
 マルイノモアリ、ホソナガイノモアリ、太キナ
 ノモ、小サナノモアリマス。クルクルマハツク
 モノスニカカルノモアリマス。水ノウ
 チテ、フネノヤウニナツテ、ハシルノモ
 ス。タクサンチツタトコロハ、土モミエマセ
 オハナハモミチノハラ一マイヒロヒマシタ。ソレ
 ヲモツテキテ、カミヲソノカタチニキリマシタ。
 イロモツノトホリニツケマシタ。モシナツテア
 ツタラ、ドンナイロヲツケタアセウ。(全文)(一九
 頁—二三頁)

十三 ナゾ

ワタクシノキモノニハ、ハリガイツバイハエテ



キマス。イマハ木ノ上ニキマスガ、モウスコシ
タツト、キモノヲマイテ、下ヘトビオリマス。
ワタクシノカラダハ、日ニヤケタヤウナイロ
ヲシテキマス。

ワタクシヲ火ノ中ヘイレルト、大キナコエヲ
タテトビダシマス。(全文)(三二頁—三三頁)

十四 シンネン

ドコノイヘニモカドマツガタテテアリマス。(下
略)(三三頁)

十五 ユキダルマ

タドン(三八頁)

十六 タコノウタ

タコタコアガレ(下略)(三九頁)

十九 天ジンサマ

コレハ天ジンサマノオミヤデス。ココニハウメ
ノ木ガタクサンアリマス。モウハナガサキハジメ
マシタ。白イノモ、アカイノモアリマス。アノ太
イ木ハカレタヤウニミエマスガ、タクサンツボ
ミヲモツテキマス。(四九頁)(中略)コノオカタハ
ウメノ花ガオスキデシタカラ、ドコノ天ジンサ
マノオミヤニモ、ウメノ木ガウエテアリマス。

(五二頁)

二十二 ワタクシノエホン
大キナナギナタ(五九頁)

ヤリ(六〇頁)

二十四 花サカヂイ(二)

ヨイオヂイサンハ、タイソウカナシンデ、犬ヲウヅ
メテ、ソノ上ニ小サナマツノ木ヲ一本ウエマ
シタ。ソレガズンズン大キクナツテ、一月モダ
ナイウチニ、天マデトドクカトオモフヤウナ、
大キナ木ニナリマシタ。ヨイオヂイサンハ、コノ
木ヲキツテ、ウスヲツクリマシタ。(下略)(六五頁
—六七頁)

尋常小學讀本 卷三 (第二學年兒童用)

一 サクラ

コノ二三日ノアタタカサテ、サクラノ花ガミゴ
トニサキマシタ。一バンキレイイナノハツツミノサ
クラデス。花ガドコマテモサキツヅイテ、トホク
カラミルト、白イマクラハツタヤウデス。オミヤ
ノモリノスキノ木ノアヒダカラ、白イ花ガチ

ヲチラミエルノモ、ウツクシウゴザイマス。ガクカ
ウノモンノワキノシダレザクラハ、モウ一ヒラ
二ヒラチリハジメマシタ。ウラノ二三本ハヤヘザ
クラテ、マダサキマセン。(全文)(一頁—三頁)

三 ワラビトリ

マサヲトマツキチガ山ヘワラビヲトリニイキ
マシタ。山ニハワラビガタクサンテキマス。モ
ウヒライタノモアリ、土カラテタバカリノモ
アリマス。太クテヤハラカナノヲヨツテトリマシ
タ。(下略)(六頁—七頁)

十二 タケ

四五日マヘニアタマヲダシタタケノコガ、モウ
コンナニノビテ、私ノセイトオナジクラキニナ
リマシタ。コレカラ二三日タツタラ、マダズツト
タカクナリマセウ。ダンダンノビルト、タケノカハ
ガオチテ、アラアヲシタ竹ニナリマス。竹ハイロ
イロナヤクニタチマス。ダイ一タケノコガタベラレ
マス。タケノカハテハモノヲツツミマス。フデノ
チク・モノサシ・フエ・ザル・カゴナド、竹ヲ作ツタモ
ノガタクサンアリマス。竹馬モ竹ヲコシラヘ、
タコノホネモ竹ヲ作りマス。ソノホカ、竹ノ

スタレモアリ、竹ノカキネモアリマス。タルヤ
ヲケニモ大テイ竹ノタガガカケテアリマス。モ
ノホシザヲニモ、ハタザヲニモ、竹ヲツカヒマス。
竹ノツカヒミチハマダマダタクサンアリマス。
(全文)(三三頁—三六頁)
(挿繪—竹・箭の圖)

十四 ホタル

ウチハ(四一頁)

十九 かへるとくも

しだれやなぎ(五二頁)

尋常小學讀本 卷四 (第二學年兒童用)

四 カキトクリ

門ノ外ニカキノ木ガ三本アリマス。年令ハ
エダガヨレルホドミガナリマシタガ、キザハシ
デスカラ、モウ大テイモイデシマヒマシタ。ウラ
ノミチバタニアル五六本ノ木ニモ、タクサンナ
ツテキマス。アレハシブカキテ、マダジユクシマセ
ン、スコシ赤クナリカガツタバカリデス。ジユクス
ト鳥ガキテツツキマスカラ、二三日マヘニカカ

シヲ立テマシタ。コノシアカキモサハスト大ソ
 ウアマクナリマス。去年ハホシテ、クシガキニモ
 シマシタ。コノゴロハクリノオチルジアンテス。
 毎朝早クオキテ、ウラノ山へ行ツテ見ルト、タ
 クサンオチテキマス。今朝モ二十ホドヒロツテ
 キマシタ。ミンナ大キナクリテ、ユデテタベテモ、
 ヤイテタベテモ、大ソウオイシウゴザイマス。アチ
 ラノ林ノ中ニハ、ドンクリノ木モ四五本アリ
 マス。ドンクリハタベラレマセン。(全文)(一〇頁—
 三頁)

五 ふじの山

ふじはよい山、うつくしい山。(中略)ひろいせか
 いなたづれてみて、又ささい山うつくしい
 山。(一四頁—一六頁)

(挿繪—富士山の遠景)

六 ふじの まきがら
 るのしし(一七頁)

九 ちびきあみ
 魚網のろき(二八頁)

二十三 雪ノ朝
 (上略)ヤブノ竹ハ弓ノヤウニマガツテ、中ニ

第二 メバエ

私ハモ、ノ木ノメバエデス。私ガ土ノ中ヘウツメ
 ラレタノハ、去年ノ夏ゴロデシタ。今年ノ春ニナ
 ヲテ、ソロ／＼カタイキモノヲマイテ、土ノ外ヘ
 アタマヲ出シマシタ。暗イ所カラ明ルイ所ヘ出
 テ、日ニテラサレタリ、風ニアタツタリスルノハ、サ
 ツバリトシテヨイ心モチデス。今ハ短イクキニ細
 イ葉ガ三四枚ツイテ、キルバカリデスガ、コノクキガ
 ノビルト、葉モタクサンニナリ、枝モダン／＼出テ來
 マス。今ハ根モ小サウゴザイマスガ、コレモオヒオ
 ヒ大キクナツテ、ソレカラソレヘト細イ根ヲヒロゲ
 マス。サウシテシマヒニハ大キナモ、ノ木ニナツ
 テ、美シイ花ガサイタリ、ウマイ實ガナツタリ
 ルノデス。

皆サンガ花ヲ見タイ、實ヲ食ベタイトオ思ヒナサ
 ルナラ、私ヲダイジニシテ下サイ。(全文)(四頁—
 七頁)

(挿繪—桃の種子発芽の状態)

第六 水のだび

(水源涵養)

第十二 鳥ノス

ハ、サキガ土マデトドイテキルノモアリマス。
 ニハノ松ノ木ハワタヲノセタヤウニ見エマ
 ス。ハノオチタ木モ皆マツ白ニナツテ、花ガ
 サイタヤウデス。(下略)(七六頁)

二十四 夜マハリ
 ヒヤウシ木(七九頁)

二十五 ぶだご
 たこのほね(竹材の利用)(八一頁)

二十六 ウグヒス

梅ノ木(八四頁)

二十九 ヒナマツリ

モモ、ネコヤナギ(九三頁)

三十 なすのよいち
 扇、弓、矢(九五頁)

尋常小學讀本 卷五 (第三學年兒童用)

第一 天の岩屋

(上略)ねこぎにした大きなさかきの木を立てて、その
 枝にはかゞみや玉がかざつてあります。(下略)
 (二頁)

(上略)草ヤ木ノ葉ヲマセテ作ツテ、内ガハニハ毛
 ガシイテアリマシタ。(下略)(三二頁)

第十四 茶

コレハ茶ノ木デス。枝モ葉モヨク茂ツテキマス。茶
 ハ暖イ所ニヨクソダツ木デ、高サハ一丈グラキニ
 モナリマスガ、大テイ三四尺ノカブニ作リマス。コ
 レハ茶ノ葉デス。ヨクソダツタ葉ハ長サガ二三寸ア
 リマス。コイミドリ色デ、ツヤガアリマス。十月ゴ
 ロ、白イカハイラシイ花ガ咲キマス。實ハツバキノ實
 ノヤウニカタクテ、ソノ中ニマルイ種ガ二ツ三ツ
 ズツアリマス。(下略)(三七頁—三八頁)

(挿繪—茶の樹・葉・花・茶園の圖)

第十五 梅ほし

第十八 狸

第二十一 ひかうき

(飛行機用材の解説)

第三十三 火

(上略)昔ハ木ト木ヲコスツテ火ヲ出シマシタガ、
 ソレカラ後ニハ、石ト金ヲ打合ハセテ出スヤウニ
 ナリマシタ。今テハマツチトイフペンリナ物ガ出
 來テキマス。火バチナドニ入レル炭ハ、木ヲ焼イテ

コシラヘタ モノアス。ソレユエ 木炭 トイヒマス。石炭ハ大昔 生エテキタ 植物ガ、土ノ中ニウツマツテ出来タモノアス。石ノヤウニカタク ナツテキマスカラ、石炭トイフノアス。石炭ノ火ノ力ハ 木炭 ヨリモズツト強イノテ 汽車・汽船ヤソノ外イロ／＼ナキカイヲ 動かスニハ、オモニ石炭ヲ使ヒマス。火ヲトボス油ニモイロ／＼アリマス。植物カラ取ツタモノモアリ、(下略)(九六頁―九八頁)

●尋常小學讀本 卷六 (第三學年兒童用)

第二 日本のけしき

日本には山が多い。松や杉やひのきがよく茂つてゐて、目がさめるやうなみどり色が一面に山をつんでゐる。春は花の雲、秋はもみぢのにしきで、ながめが時々かはる。(下略)(三頁)

第三 日本の花

一年、三百六十五日、我が日本の國の内、花の咲かざる時はなし、花の咲かざる里はなし。(下略)(六頁)

第六 秋の野

野も山も秋の色にそまりました。黄色い林の中で、

かへてやはぜのまつかな色が一番目に立ちます。葉も實も赤くなつたかきの木の上で、もすが勢よく鳴いてゐます。(下略)(一四頁)

第七 鹽トサタウ

(上略)サタウハイロ／＼ノ植物カラ取ル。(下略)(二〇頁)

第十二 杉

我が國ニハ 杉多シ。杉ハヨク成長スル木ナリ。一尺バカリノ 苗木モ、十數年ノ後ニハ見上グルホドノ 高サトナル。高キ杉ノ谷ヨリ山ニカケテ 生ヒ茂レルハ、マコトニミゴトナルモノナリ。杉材ノ用ハ、ハナハダ廣シ。柱・テングヤウヲハジメ、戸・板・ベイ・テングシ・船板・橋板ナドニ用フ。ソノ外、ヲケ・タル・ハコナド、杉材ニテ作レル物少カラズ。(全文)(三七頁―三八頁)

第十四 ゴム

甲「ゴムデコシラヘタ物ハイロ／＼アリマスカ、アナタハ何カ見タコトガアリマスカ」
乙「ゴムマリヤ消ゴム ハスツカリ ゴム デ出来テキマス。人力車ヤジテン車ノワニモ ゴムガ 附ケテアリマス。イツカ車夫ガハイテキタ タビノ裏ニ、ゴムガ附イテキタノヲ 見タコトガアリマス」

甲「マダアリマセウ。モウ少シ考ヘテゴランナサイ」
乙「マダアリマシタ。オイシヤサマガシンサツヲスル道具ニモ、ゴムノクダガ 附イテキマシタ。又ゴム人形ヲ見タコトモアリマス」

甲「ゴムハドウシテツクルト思ヒマスカ」
乙「ヨクハ知リマセンガ、木カラ 取ルノダトイフコトヲ聞キマシタ」

甲「サウアス。ゴムノ木ノ汁カラツクルノアス。ゴムノ木ハ暑イ國ニ生エル木デ、ソノ木ノミキニキズラ 附ケテオクト、乳ノヤウニ白クテネバ／＼シタ汁が流レ出マス。ソレヲ小サナ入物ニ受ケテ、バケツニ集メルノアス。ソレニクスリヲ入レ 固メテ、カラカシマス。ソレヲ仕上ゲルト、リツバナ ゴム ニナルノアス。ゴムノサカンニ取レル所デハ、ゴムノ木ノ林ガ 日本ノ杉林ノヤウニツヱイテキマス」。(全文)(四一頁―四五頁)
(挿繪―バラ護謨樹の小枝・採液の状況)

第十六 木上リノ名人

ムカシ 或所ニ、木上リノ名人トイハレタ人ガアリマシタ。或日、トナリノ 男ガ 高イ木ノ上デ 枝ヲ切ツテキルノヲ 見テキマシタ。(下略)(四七頁)

第十九 熊

(上略)日本ニスム熊ニハ、黒熊トアカ熊トノ二種アリ。(下略)(五八頁)

第三十 繪葉書

(上略)コレハ上野公園ノ花盛ノ繪葉書アス。松ヤ杉ノ中ニマジツテ、櫻ノ花ガマツ白ニ咲イテ、花見ノ人ガ大勢出テキマス。(下略)(九六頁)

●尋常小學讀本 卷七 (第四學年兒童用)

第一 春

(上略)梅の若葉が出る頃は 櫻の花盛である。長い冬の間眠つてゐた草や木が、一度に目をさまして、勢よく若芽をふいてゐる。(下略)(二頁)

第五 ちゑだめし

(上略)今度は大國の王様が、まつくろにのつた木のぼろを一本送つて、「ごちらが本で、ごちらが末が、をしへてくれ」と言つてやりました。
さなりの國では、又前の年より にさうだんしますま、年よりは「それは川の中へなげこんで見ればわか。少ししづんで 流れる方が 本だ」とをしへました。その通りにして 本末を定めて、しるしを附けてか

へしました。(下略)(一八頁)

第十 豆のいぞく

にはの藤の花が咲いて、紫の長い花ぶさがゆらゆら風に動いてゐる。島のふんごうが、かきの外から聲をかけた。「あなたも私は親類ですから、これからお心やすくねがひます」と言ふ。藤はおどろいて、「始めてうけたまはりました。ごういふわけで親類なのでせう」と尋ねるさ、ふんごうは「おたがひによく似てゐるではありませんか。第一あなたにも私にも豆がなります。又葉は羽形で、二枚づつ向ひ合つてゐますし、花は同じやうに蝶の形をしてゐます。大豆・小豆・さげ・そら豆・なた豆などは、みんな私どもの親類です。私どもいぞくの中には、つるになるものさならぬものがあります。」「さうでございますが、私はちつとも気がつかずにおりました。なるほど私にも豆はなりますが、島の藤豆さんさちがつて、食べられませんが。大きななりをしてゐながら役に立たないで、まごごにおはづかしうございます。」「あなたはそれお美しい花だけでたくさんです。あなた程大きくてりつばな花ぶさを持つてゐるものは、親類中には外にありませんまい。親類中で、小さくてかはいらしいのは、あの春の野に咲く、れんげ草さんでございます。」「(全文)(三

三頁―三六頁)

第十一 材木

材木ノ中ニテ最モ廣ク用ヒラル、モノハ、松ト杉トニシテ、コノ外、ヒノキ・ケヤキ・栗・桐・カシ・クルミ等アリ。ヒノキハ、上品ナル材木ニシテ、社又ハ家ヲ建ツルニ用ヒ、又建具・飛行機等ノ材料トス。ケヤキハカタクシテ美シキガユエニ、柱・床板・チガヒダナ・家具・汽車・電車等ヲ造ルニ用フ。栗ハカタクシテナガククチザレバ、家屋ノ土ダイ、鐵道ノマクラ木ナドトス。桐ハ輕クシテ美シ。机・ハコ・タンス・ハキモノ等ノ用材トスルハコレガタメナリ。カシハカタクシテ折レガタケレバ、スキ・クハノエ・車ノワ等ニ用フ。クルミハ銃床・飛行機ノプロペラー等ニ用フ。輕クシテ強ケレバナリ。(全文)(三七頁―三八頁)

第十五 日本紙ト西洋紙

西洋紙ガ日本紙ニ向ツテ、「世ノ中ガヒラケテカラ、僕等ノ仲間ノ方ガ君ヲチノ仲間ヨリモ、ヨケイニ使ハレルヤウニナツタカト思フ。マツ毎日ノ新聞ハ西洋紙デアルシ、書物モ近頃ハ大テイ西洋紙デコシラヘルヤウニナツタ」と言フト、日本紙ハ「マツコノザシキヲ見渡シテモ、タクサンノシャウジハ皆僕等ノ仲間デハツテアルリ、ソレカラ又ダンムトノビテイクノニ氣カツイタ。ソコデ、一日ノ中ニ、物ノ高サトソノカゲノ長サガ、チヤウド同ジニナル時ガアルニチガヒナイト考ヘテ、次ノ日、庭ノマン中ニ一本ノボウヲ立テテ、朝カラ幾度トナクソノカゲノ長サヲハカツテ見タ。ソノ中ニ、思ツタ通りボウノ高サトカゲノ長サガ同ジニナツタノデ、スグニ杉ノ木ノカゲヲハカツテ見タ、二丈八尺五寸アツタ。兄ニコノ事ヲ話スト、「ソレハ良イ思附デス。サウスレバドナ物ノ高サデモ、知ルコトガ出來マス。物ノ高サトカゲノ長サガ同ジニナル時ハ、一日ノ中ニ、午ト午後ニ一度ツツアルノデス」と言ツタ。(全文)(五七頁―六〇頁)

第二十三 燒物トヌリ物

(上略)ヌリ物ハ木・竹・紙ナドニテ造リタル下地ニ、ウルシヲヌリタルモノナリ。ソノ色ニ黄・赤・黒・青ナド様々アルハ、皆ウルシニ色ヲ着ケタルナリ。ウルシノ上ニ金又ハ銀ニテエガキタルモノヲマキエトイフ。(七六頁)

尋常小學讀本 卷八 (第四學年兒童用)

第一 天叢雲劍

デハナイカ。ゴ、ニアル扇モウチハモヤハリサウダ」と言ヒマス。西洋紙ハ「君等ハ表ダケシカ役ニ立タナイガ、僕等ハ裏表トモニ使ハレル。便利ニオイテハトテモカナフマイ」と言ヒマス。日本紙ハ「イヤ、君等ハ破レ易クテ、少シモ強ミトイフモノガナイ。日本紙ハコヨリニシテ物ヲシバルコトガ出來ル。元結ヤ水引ノヤウナアンナ丈夫ナ物ハ、日本紙デナケレバ出來ナイ」。トジマンシマス。西洋紙ハ「ナホ負ケズニ、一君等ハ水ニヌレルト、スグニベタ〜ニナルガ、僕等ハ少シグラキ水ニヌレテモ、裏ヘハ通ラナイ。日本紙ハ笑ツテ「僕等ノ仲間ニハ、カラカサニナツタリ、合羽ニナツタリスルモノガアル。水ニヌレルグラキハ何デモナイコトダ」。西洋紙ハ又「葉書ヤ、切手ヤ、印紙ナドハ、皆僕等ノ仲間ダゾ」。ト言ヒマス。日本紙ハ「神ダナヲ指サシテ、「ソナニイバツテモ、アノ神ダナノ御札ヤ御幣ニハナレマイ」と言ヒマシタ。(全文)(四八頁―五二頁)

第十七 木ノ高サ

利三郎ノウチノ庭ノスミニ、高イ杉ノ木ガアル。利三郎ハドウカシテソノ高サヲ知りタイト、始終考ヘテキタ。或日利三郎ハ、朝ハ物ノカゲが大ヘンニ長イガ、ダンダンニチマツテ、晝頃ニナルト、ソノ物ヨリモ短クナ

(上略)川上の方から霧が流れて来ました。(下略)(一頁)

第三 たけがり (松茸)

秋の日の空すみ渡り、風暖に、さてもよき日や。山遊びするによき日や。友よ来よ。手がごを持ちて、いざ裏山にきのこたづれん、山深く行きてたづれん。たざり行く細路づたい、はや、かうばしくきのこにはへり。山風にきのこかをれり。うれし此の松の根本に、先づ見附けつ。さ高く呼ぶ聲。やまびこにひびく呼聲。いでや、あの岩の小かげに、皆打寄りてえもの敷へん。たけがりのいさをくらべん。(全文)(一〇頁—一二頁)

第六 昨日見夕物

(上略)浅吉「榎ノ木ノ枝ニ圓ク茂ツタ別ノ木ガクツ附イテギテ、ソレニ赤イ實ガ ナツテキマシタ。アレハ何デセウ」。兄「ソレハヤドリ木トイフ木ダ。外ノ木ニクツ附イテキルノハ、人がヨソノウチニ泊ツテキルヤウナモノダカラ、サウイフノダラウ」。(下略)(二二頁)

第八 秋のくだもの

此の頃、いろ／＼なくだものが熟してゐるが、最も多く目に附くのはかきである。今年ばかりの當り年だと思えて、ごこの木にも鈴なりになつてゐる。散残つた真赤な葉と黄色な實が日に照らされて、すみ渡つた秋の空に

レバナラナイ。(四三頁)

第十六 指物師

(指物細工・指物用材の解説)(五八頁)

第二十六 虎と猫(九八頁)

第二十七 虎 狩

南の方の熱い國には、日本人がゴムの木を仕立ててゐる所が方々にある。其のゴム園の一つに虎が出て来て、度々家畜などをさらつて行くので、人々は皆困つてゐた。(下略)(一〇二頁—一〇二頁)

第三十 旅行先より

(一) 富士山

尋常小學讀本 卷九 (第五學年兒童用)

第一 大神宮參拜

(上略)御山木細工・貝細工など賣る店を左右に見て、町を南へ行けば、宇治橋のたもきに出づ。五十鈴川は水清くして、流早し。橋を渡りて神苑に入れば、道をはさみて廣きしばふに、松の緑こまやかなり。一の鳥居より少し進めば、千年もへたらんかと思はる、老木枝をまじへて高く天をつく。其の神々しさはいはん方なし。(中略)神殿

浮いて見えるのは、いかにも美しい。ごこの山へ行つて見ても、栗の木の枝にはいががふみ割れてゐて、つやつやした實がそこにもここにも落ちてゐる。中にはいがのまゝ落ちてゐるものもある。それを足でふんで、ほうきでむくのもおもしろい。又御宮の森には大きなしひの木があるが、風の吹いた朝などは、其の下にしひの實が一面に散らばつてゐる。うちの庭のさくらももうよく熟した。大きな實が張裂けて、たくさんの赤い種が見えてゐるのは、大きな口をあいて笑つてゐるやうである。みかんやきんかんもそろ／＼黄ばみかけた。うちの島のみかんも、早い分はもう食べられるやうになつた。二三日前に初物をもいで、佛様へ供へた。もう少したつさすつかり熟して、黄金の玉のやうになる。ゆずやだい／＼の實もたくさんなつてゐるが、ごこのを見てもまだ青いのが多い。(全文)(三〇頁—三二頁)

第十 おぢいさんの命日

すゞり箱。本立(三八頁)

第十一 火事

(上略)火元ハ郵便局ノ裏通ノ材木屋テ(四〇頁)(中略)多分煙草ノ吸ヒガラガ元ダラウトイフ話ダ。一服ノ吸ヒガラカラコンナ大火事ニモナル。火ノ取扱ハ大切ニシナケ

の御屋根はかやにてふき、其の棟にはかつを木を並べ、棟の兩端に千木をうち達へたり。材は皆ひのきの白木を用ひ、金色の金物をきら／＼と日にかゞやけり。(下略)(三頁)

第十 樺太だより (第三信)

真岡から汽車で、山の中ばかり通つて、此の豊原に着きました。其の途中で、とと松・えぞ松などの森林が幾里さもなく續いてゐるのや、五六尺もあるふきの生ひ茂つてゐるのを見た時には、しみじみ樺太らしいと感じました。(中略)(四四頁)

樺太は天産の多い土地で、漁業の外にも、農業・林業・鑛業いづれも追々盛になつて行くさうです。石炭の多い事はかれて聞いて知つてゐましたが、森林がこんなに行らうとは思ひませんでした。樺太の全面積の九割が森林といふのですから、大それたものです。これからきり出したとと松やえぞ松などで、紙の原料のバルブを造つてゐる大きな工場が、方々にあります。(下略)(四六頁)

第十三 西洋の子供

(上略)「國によると、りんごの木などを通路の並木にしてゐる所があります。さういふ所では、大てい其の實を

賣つて、公共の費用にあててゐるのです。秋になると、きれいな赤い實が、手の届く所にもたくさんなつてゐますがそれを取る子供はめつたにありません。公の物だといふ事をよく知つてゐるのです。或時、私が其のりんごの並木の下を歩いてゐると、學校歸りの子供が、何かしきりに話し合ひながら、私の二三間先を歩いて行きます。やがて見事なりんごが木の下に落ちてゐるのを見附けて、一人がそれを拾ひ上げました。どうするかと思つて見てゐると、木の根本の、人のふまないやうな所に置いて行きました。私はつくづく感心してしまひました。(下略)(六〇頁—六二頁)

第十四 軍艦生活の朝

軍艦。甲板。洗刷毛(六八頁)。 煙草盆(六九頁)

第十五 緑の天地

(上略)梅の葉陰には、鈴なりになつた緑の玉が、急に目立つて来た。(七一頁)
若い廣い葉を廣げて、天までもさのびる桐のずばえ。(下略)(七二頁)

第十六 税

國税。府縣税。市町村税(七五頁)

第十七 かぶりもの

(上略)きやう木・麥わら・バナマなど、夏の帽子は輕げなり。(七七頁)
(中略)昔の風を其のまゝに、田植・草取・取入れに、農夫と辛苦共にする、すげ笠・あみ笠たふさしや。車夫のかぶるは形より、まんぢゆう笠の名もおかし。(下略)(七九頁)

第十九 鉛筆ノ製造

(上略)初ノ室ニハ、縦六寸、横二寸バカリノ薄イ板ガ、山ノ様ニ積ンデアリマシタ。案内ノ人ハ「此ノ板ハ鉛筆ノ軸ニナルノデス」ト説明シテクレマシタ。(下略)(八二頁)

(挿繪—鉛筆用薄板が鉛筆になる順序を示せる圖)

第二十二 熱イ國々ノ人

廣イ地球ノ上ニハ、ゴク寒イ國モ少クナイガ、又ゴク熱イ國モタクサンニアル。サウイフ熱イ國々デハ、人々ノ生活ノ様子モ我々トハ餘程違ツテキル。
着物ハ大テイ簡單デ、幅ノ廣イ布ヲ肩カラナ、メニマトウテキル所モアレバ、フロシキノヤウナ布ノ真中ニ穴ヲアケ、其處ニ首ヲ通シテ着テキル所モアル。又腰蓑ノヤウナモノヤ、獸ノ皮ナドヲ腰ニマイテキルダケノ所モアル。

食物ハ我々ト同様ニ、穀類ヤ、野菜ヤ、肉類ヲ食ツテキル所ガ多イガ、中ニハ田畑モ作ラズ、家畜モカハズ、野生ノクダ物ヲ常食ニシテキル所モアル。

家ヲ珍シイノハ、水中ニ數十本ノクヒヲ打ツテ、其ノ上ニ建テタモノ、マルテ鳥ノ巢ノ様ニ、高イ木ノ上ニ造ツタモノナドアル。

熱イ國々ニハイロイロノ植物ガ勢ヨク生ヒ茂ツテ、濃イ緑ノ陰ヲ作ツテキル所ガ多イ。ソナ所ニハ猛獸・毒蛇ナドガタクサンニ棲ンデキル。シダガツテソレヲ狩ル事ガヨク行ハレル。中テモ勇マシイノハ、象ニ乗ツテ虎ヲ狩ル方法アル。ヨクナラシタ象ヲヤアヤクサムラヘ乗り入レテ虎ヲ追出シ、唯一撃ニ鐵砲ヲ撃殺スノアル。

若シタマガ急所ヲハツレルト、手傷ヲ負ウタ猛獸ガ象ノ背中ニヲドリ上ツテ、人ヲ食殺スコトモアル。又オモシロイノハ鰐ヲ釣ル方法アル。大キナ釣針ニエヲツケテ、地上一二尺ノ高サニツルシテ置ク。鰐ガ飛附イテ食フト、釣針ニカカル。逃ゲラレナイデモガイテキルトコロヲ、長イヤリヲ突殺スノアル。熱イ所ノ中テモ、沙漠ニナツテキル地方ハ、全ク外ト様子が違フ。コンナ所デハ、年中ホトンド雨が降ラナイカラ、大テイ草ヤ木ハ無クテ見渡ス限リ砂ノ原、岩ノ岡アル。タゞ所々ニオ

第二十三 森

我ハ、夏ノ森ノ靜カにして、生氣満ち／＼たるを愛ス。緑ノ色ヲ競ヘル繁キ木立。中に一きは高くそびえて、こすゑに雲もかゝるベキ大杉ノ群、横にはびこりて、廣キ陰を作れる樅ノ老木。日光のさしたるこまなき木々ノ根本には、青きこけ一面に生ひて、毛織ノ敷物を敷けるに似たり。薄暗キ木陰に茂れる山つばきは、つや／＼し

く濃き緑の葉の間に、小さきこぶしの様なる實をかくしたり。かたはらに並び、木振すなほに、のびくさしたるはねむの木にて絹糸をつかれたるが如き花美しく、花の形、葉の形、見るからに涼しげなり。木立まばらなるあたりは、様々の草生ひ茂りて、たくましくわんざうの花、しほらしきつゆくさの花、その他、白き花、赤き花、黄なる花、思ひくりに咲きみだれたり。中にも見事なるは山ゆりなり。丈高き莖に、五つも六つも着きたる大りんの花の、他の花ごもを眼下に見て咲きほこれる様、此の中にての花の王なるべし。右を見て左を見ても、目に入るものは青葉にて、その間を分けて吹來る風の涼しさ。ごこもなく聞ゆるせみ、小鳥の聲、何れも夏の日の樂しさを讚美するが如し、我は、夏の森の靜かにして、生氣満ちくたるを愛す。(全文)(一〇三頁—一〇五頁)

第二十七 加藤清正

繪(一二三頁)

第三十一 雨と風

梅の實の熟する頃(二四二頁)。冬木立。木枯の風(一四四頁)

第五 水車の歌

暮の流に、掛けたる水車、朝の暗きに、廻り初むれば、轆車ゆるく、刻みくして、きねはうすづき、ひきうすめぐる。(下略)(二五頁)

第八 日光

(上略)次の門を唐門といふ。木材は一切唐木なり。(下略)(三六頁)天然の美は、更に人工の美よりも勝れたり。(下略)(三七頁)

第十三 冬景色

黄に赤に林をかざつてゐた木の葉も大方は散果て、見渡せば、四方の山々のいたゞきは、はや眞白になつてゐる。山おろしの風が身にしみて寒い。御宮の森のこんもりと茂つた中から、ほうきのやうないてふの大木が一本、高く突立つて雲をはらはうさしてゐる。中程の枝に鳥が二羽止つて居て、さつきから少しも動かない。廣い田の面には、人影一つ見えないのみか、かゝしさへも残つてゐない。あぜのはんの木に集つてゐる雀が、時々群がつて飛立つ。(五七頁—五八頁)(中略)霜にやけて赤くなつた杉垣の内には、寒菊が今を盛と咲いてゐる。物置の後のだいだいの木には、黄色い大きな實が、枝もたわ

尋常小學讀本 卷十 (第五學年兒童用)

第一 大和巡

(上略)大佛殿は高さ十五丈六尺、東西十八丈八尺、南北十六丈六尺、眞に世界最大の木造建築物なり。(中略)奈良見物を終へて、法隆寺に向ふ。此の寺は聖德太子の建立し給ひしころ、千三百餘年を経たる金堂・五重の塔・中門は、木造建築物中世界最古のものにして、今に壯麗なる姿を存し、(中略)三輪山は松・杉生ひ茂りて、緑したるが如し、此處に大神神社あり。(下略)(三頁—六頁)

第四 印刷

多武峯—來て見れば、こゝも櫻のみね續き、吉野・初瀬の花の中宿。(七頁) (上略)此ノ外ニ木版印刷モアル。其ノ方法ハ、版下ヲ堅イ木ニハリ附ケ、其ノ上カラ寸分違ハナイヤウニ彫ツテ版木ヲ造リ、一枚ツツ手刷ニスルノテアル。木版ハイタミ易イカラ、タクサン刷ラナケレバナラヌ場合ニハ、木版カラ更ニ電氣銅版トイフモノヲ造ツテ、機械ニガケテ刷ル。此ノ讀本ナドハ、此ノ方法ヲ印刷スルノテアル。(二四頁)

第十五 阿里山ノ森林

明治神宮ノアノ見上ゲルヤウナ大鳥居ハ、阿里山森林ノ樞ヲ使ツタモノデアアル。今テハ阿里山トイヘバ、樞ノ産地トシテ知ラナイ者ハナイガ、明治三十二年ニ一警官ガ発見スルマデハ、カウイフ所ガ臺灣ノ山中ニアラウトハ、誰も思ハナカツタ。阿里山ノ森林ハ、嘉義トイフ町ノ東方十八里ノ所ニ在ツテ、廣サハ東西二里、南北五里ニワタツテキル。位置カライヘバ、半バハ熱帯ニ屬シテキルガ、海拔二千八百尺カラ八千七百尺ニモ及ンデキルカラ高イトコロハ氣候ガ溫和テ、内地ニアルヤウナ植物ガ多イ。五六千尺グラキノ所ニハ、重ニ樅・櫻等ガ茂ツテアリ、七千尺ヲ越エルト、有名ナ檜ノ森林トナル。八千尺以上ニナルト、トガヤ・姫小松ナドガマジツテキル。阿里山ハ地球ガ植物ノ生育ニ適シテキルカラ、コレ等ノ樹木ハ、幹ヲ接シ、枝ヲマジヘテ、晝モ暗イ程盛ニ生ヒ茂ツテキル。中ニモ檜ニ至ツテハ他ニ類ノナイ程長大ナモノガ多ク、直徑十數尺、高サ百四五十尺ニ及ブモノモ少クナイ。殊ニ神木トイハレテキルノハ、直徑二十一尺、

周圍六十四尺、樹齡三千年ニ及ンテキル。

阿里山ノ伐木事業ハ、臺灣總督府ノ手ヲ經營サレテキル。毎日毎日多數ノソマガ伐木ニ從事シテキルガ、何シロ高山ノ事デアアリ、シカモ木が大キイカラ、伐倒シテモ、ソレヲ集メテ運ビ出スノハ、ナカク困難ナ仕事デアアル。ソコデア所々ニ新式ノ集材機械ヲスエ附ケテ、山ノ上ヤ谷ノ底カラ材木ヲ運ンテ來テハ、汽車ニ積込ムノデアアル。此ノ汽車ハ、モツバラ材木ヲ運ビ出スルメニ、嘉義ト阿里山内ノ作業地トノ間ヲ運轉シテキル。平地カラ八千尺以上ノ山地ニ上下スルノデアアルカラ、鐵道開通ノ當初ハ非常ニ故障ガ多クテ、トモ役ニタチサウニモナカッタ。其ノ後苦心研究ノ結果、汽車ノ大改良モ出來、従業員ノ技術モ進ミ、今日デアハ安全ニ運轉スルコトガ出來ルヤウニナッタ。作業地ヲ出タ汽車ハ、險シイ山腹ヲ縫ヒ、深イ谷ヲ渡リ、曲リクネツテ進ム。其ノ間、乗務員ノ苦心ハ大シタモノデア、チヨット油斷スレバ、汽車ハ忽チ顛覆シテシマフ。山カラ下ツテ來タ汽車ハ、東洋第一ト稱セラレル嘉義製材工場ニ入ル。此ノ工場ニハ、大ジカケノ製材機械ガスエ附ケテアツテ、大小様々ノノコギリガ勢ヨク動イテキル。貨車カラ下サレタ材木ハ、先ヅ大キナ貯水池ニ貯ヘラレルガ、必要ニ應ジテ池カラ引

上ゲラレテ、自動的ニ工場ヘハイツテ行ク。サウシテ場内ヲ通ル中ニ、幾ツカノノコギリニカカツテ、見ルノ角材ヤ板ナドニヒキ割ラレル。カウシテ出來上ツタモノハ、本島内ハイフマデモナク、廣ク内地・朝鮮等ニ送り出サレルノデアアル。(全文)(六三頁—六九頁)
(挿繪—阿里山の神木、阿里山の森林鐵道)

第十九 温室の中
(上略)次の室には大きい熱帯植物類が並んでゐる。椰子、バナ、コーヒー、ゴムの木などは、名は聞いてゐたが實物を見るのは始めてである。(下略)(八五頁)
(挿繪—つばがづら及び蘭類の圖)

第二十 スキー遊び
(スキーの來歴及びスキーが森林作業上有用なること、スキー用材等につきて解説)
(挿繪—スキー用具一式の圖、スキーにて登山と下山の圖)

第二十二 阿蘇山
(阿蘇山の解説)(九五頁—一〇一頁)
(挿繪—阿蘇山の地圖と噴煙の圖)
第二十五 分業

マツチの製造場へ行つてみるに、大勢の職工が、それぞれ手分をして働いてゐる。材木を機械にかけて、軸木をこしらへる者、其の軸木を乾かす者、乾いた軸木の先へ薬品を附ける者、それを温室で乾かす者、乾いたのを揃へて箱に入れる者、十箱づゝ集めて紙に包む者など、いろ／＼ある。(下略)(一〇九頁—一一〇頁)

第二十六 家

人は皆静まりいれし真夜中に、家組立つる木々は今語り出しぬ。我は元木會の楯よ、白雲をうなじに巻きて、峰高く空にそびえき。「我は元吉野の杉よ、櫻木の花をよそにて、霧深き谷間に立ちき」。「我は元丹波の松よ、山こむる霞を後にいかだして都に來けり」。「床柱歎きて語る、熱き國、茂る林に、生ひ立ちし我、女ガヤサン、我が友にひざり離れて、はる／＼と五百重のしほ路、故里の空なつかしや」。「さは言へど、うらやましきは身も輕き君、床柱。あはれ我、梁や棟木やけたごもを、いつも背負ひて、片時も休む間なし」。「角柱ひざりつぶやく。主柱静かにいはく、ねだ低く、たるきは高し、壁土に塗込められて、あらはれぬぬきもあるなり。つかさなり床となる身も、それ／＼の務なもてり。梁・棟木・つかぬき・柱、何一つ取外すとも、

忽ちに家は崩れん。げに／＼と皆うなづきて、折がらの夜中のあらしに、其の後は音も聞えず。(全文)(一一二頁—一一六頁)

第二十八 保安林

森林が、我等の生活に必要な材木・薪炭材等を供給することとは、何人も知れる所なり。されど森林の與ふる利益は、これのみに止らず。森林の樹木は其の枝葉互に相交りて、雨の一度に地上に落ちるを止め、又地上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。しかのみならず、其の根は深く地中にはびこりて、山崩を防ぎ、又落葉・こけなど共に水をふくみ支ふるに、あたかも海綿の如くなるを以て雨水を貯へて水源を涵養すること共に、地上に落ちたる水の一時に流出するを防ぐ。故に若しみにだりに森林を伐荒す時は、數日のひでりにも河水全くかれはて、數時間の暴雨にも忽ち大水出で、山崩も起るべし。森林はよく暴風を支へ、其の力をそぐと共に、飛來する土砂をさへぎり、又つなみ等の害を防ぐ。故に海岸地方には、これ等の防禦を目的とする森林を見ること多し。森林は魚類に食物を供給すること共に、河水の調節をなし、又土砂・濁水等の河海に流れ出づるを防ぐを以て、魚類は森林に近き水中に多く集り來るものなり。故に森林は、漁業の爲に

も大なる利益を興ふるものさいふべし。海岸又は河岸の森林を伐りはらひたるために漁業の利を失ひたる地方も少からず。其の他、森林は、雪なだれを防ぎ、氣候を和げ、神社・佛閣又は名勝の地に風致を添へ、或は空氣を清潔にする等、其の效用すこぶる多し。森林の效用かくの如く著しきを以て、國家は法律を設け、一定の森林を指定して、みだりに其の樹木を伐取ることを禁ずるに共に、樹木の植附・手入等をもなましむ。かく公益の爲に法律によりて保護せらるゝ森林を、保安林といふ。(全文)(一二二頁—一二六頁)

(挿繪—防風・防砂林及び魚附林の圖)

第二十九 記念のいてふ

(上略)それに學校園の真中にあるあのいてふの木の側へ行くとき、また小學生にかへつたやうな氣持になるよ。あの木は、にいさん達がまだ尋常二年の時分、先生が「此の組の記念にしよう」とおつしやつて、みんな運動場のすみに植ふたのだ。それが一寸二寸さ少しづつ、のびて行くのは、實に楽しみなものだつた。

五年生の頃には、もう一間ぐらゐの高さになつてゐたが、ちやうど學校園にあつた大きな松が枯れたので、其の代りにあの木を植ふたのだ、植ふかへた時、先生が、大丈

夫つくから心配するなさくり返しておつしやつても、やはり氣になるので、朝學校へ行くとき、先づ様子を見に行くと。心配は誰も同じださ見えて、組の者が二三人はきつさ来てゐる。「君大丈夫だね」なごさ言つては、少しうなだれて来たやうに見える葉の先を手で受けてみたりした。しかし植ふかへてからは、日當りが良くなつたせゐか、以前にも増して勢がよくなり、目に見えて成長するやうになつた。卒業の時も、あの木を背景にして記念の寫眞をさつた。そんなわけだから、にいさん達の仲間が學校に集るとき、きつさあの木の側へ行く。さうしてあの時分の事を思ひ出したり、將來の望を語り合つたりするのだいづつかやはり學校で同窓會のあつた時、にいさんが「此のいてふも今に大木になるだらうが、其の頃までに、僕等の方も大將・大學者・大政治家・大實業家さ、なんでも大の字の附くものにならうではないか」さ言ふとき、誰かが「さうして、此處に集つて、大懇親會を開かう」さ言つたので、みんなが思はず拍手喝采したよ。それではあの木の方でも、にいさん達に負けないやうに早く大木にならうさ、考へて居るかも知れせんね」。「は、さうかも知れない」(一二七頁—一三二頁)

(挿繪—いてふの記念樹の圖)

第三十 ブラジルから

(上略)西の方のサンパウロ市に来てゐます。此の邊は南米中一番日本人のたくさん居る所で(中略)此の邊は世界に名高いブラジルコーヒーの重なる生産地で、(下略)(一三五頁—一三六頁)

四

森林地開墾の様子を見て歩いてゐたので、しばらく便をしませんでした。ブラジルは、何處へ行つても果もない原野さ森林です。原野は多く牧場で、牛や馬が放し飼にされてゐます。森林には、天に届くやうな大木がすき間もなく繁茂して、其の根本には、蔓草や灌木が思ふまゝにはびこつてゐます。かういふ所でも、日本人が盛に開墾に従事してゐますが、其の有様は、如何にも男らしい勇ましいものです。まづ柄の長さ一間もあるなで、灌木や蔓草を伐拂ひ、次に斧を振るつて大木を伐りにかゝる。三抱も四抱もあるのが、地響を打つて倒れる壯快さは、何さと言ひやうがありません。かうして伐倒した後乾くまではふつて置いて、四方から火をつけると、天をもがすばかりのほのほをあげて燃える。其の壯觀は實にすさまじいものです。燃えあさは取りかたづけて島さじ、コーヒー!わたの木などを植附けます。もうブラジル

の視察も大體終つたから、間もなく歸國します。(全文)(一三八頁—一四〇頁)

(挿繪—椰子其他の熱帯林木の繁茂せる中にて伐木せる状況)

尋常小學讀本 卷十一 (第六學年兒童用)

第一課 吉野山

吉野山霞の奥は知られざも、

見ゆる限りは櫻なりけり。

全山花の雲に包まれたる吉野山の光景、まのあたり見ることが如し。(下略)(二頁)

これはくさばかり花の吉野山。(二頁)

中の千本、上の千本、奥の千本、(五頁)

(挿繪—吉野山の略圖、後醍醐帝御陵の石段、奥の千本の圖)

第八課 蟲ノ農工業

蠶ノ糸ヲ吐キテ繭ヲ造ルハ、紡績ノ業ニ同ジク、葉卷蟲ノ絲ニテ葉ヲツヅリ合ハスルハ、裁縫ノ業ニ似タリ。蜜蜂ノ蜜ヲ釀シ、又巧ニ巢ヲ造ルハ、釀造ノ業ト建築ノ業トヲ兼ネタリトイハシカ。

クモハ其ノ體ヨリ絲ヲ出シテ網ヲ張り、蟲ノカ、ルヲ待
チテ之ヲ捕フ。漁業ノ類トモ見ルベシ。

ミ、ズハ地下ニ穴ヲウガチテ住ミ、土ヲ呑込ミテハ之ヲ
地上ノ穴ノ口ニ出ス。カクテ數年ノ後ニハ、地面ニ近キ
土ヲバ全ク上下ニウチ返ストイフ。農夫ノ田畑ヲ耕スニ
似タラズヤ。

蟻ハ油蟲ヲ養フ。油蟲ハ植物ノ若芽・若葉ナドニ群ガリ
着キテ、其ノ植物ノ汁ヲ吸ヒ、身體ヨリ絶エズ甘キ汁ヲ
出スモノナレバ、蟻ハ此ノ甘キ汁ヲ得ンガ爲ニ油蟲ヲ保
護シ、或ハ其ノ卵ヲ他ノ植物ニ移シテ成長セシム。コレ
即チ一種ノ牧畜ナリ。

蟻ハ其ノ種類ニヨリテ種々ノ巢ヲ造レドモ、多クハ地下
ニ穴ヲウガチテ、部屋・廊下ヲ造リ、其ノ内面ヲ壁ノ如ク
ニ圍ム。熱キ地方ノ白蟻ハ、周圍十間、高サ三間ニモ達
スル小山ノ如キ巢ヲ造リ、木質ニテ内部ヲ圍ムトイフ。
熟練ナル土木技師トモイフベシ。

アメリカノ一地方ニ産スル蟻ノ一種ニ、收穫蟻トイフモ
ノアリ。一種ノ草ノ實ヲ食用トスルヲ以テ、常ニ此ノ草
ノ多ク生ズル處ヲ選ビテ住ミ、周圍ノ雜草ヲ食切りテ、
ヒタスラ此ノ草ノ成長ヲ保護シ實ヲ熟シテ地ニ落ツルヲ
待チテ、其ノ巢ニ運ビ去ル。コレ即チ農業ニ於ケル收穫

ニ異ナラズ。(全文)(三五頁―三七頁)

第九課 養蜂

梅の花、蜜柑・柿・葡萄などの花(四一頁)。萩の花(四三
頁)。

(蜜源となる森林植物、林業の副業としての養蜂等につき
解説)

第十四課 植林

障子をあけてみるさ、まだ雨が降つてゐる。これでは明
日の山廻りはだめだと思ひながら、机によりかゝつて向
ふの方を眺めるさ、うね／＼と續く岡が雨に煙つて、ぼ
んやりと遠く見える。あそこは一昨年植付をした地蔵山
だと思ふさ、山の背を通つてゐる小路を中にはさんで、
四五尺にのびた杉の若木が勢よく立並んでゐるのが、目
に見えるやうな氣がする。あそここの植付をした時は、ま
だ寒かつたと思ひ出しながら、さつきおさうさんのいひ
ついで、明日の用意に出しておいた植林地の書付をひら
いて見る。地圖の中の薄緑に染めてあるのが一昨年植付
けた處、朱線で圍んであるのが今年伐採する處、それから
次々さいろ／＼の印が附いてゐる。「地蔵山の内、二町三
段五畝。峰通り檜苗。其の外總べて杉苗。一坪一本の割」
とおさうさんの手で記してある。一昨年植付けた時の覺

書だ。あの時「こんなに間をおいてよいのですか」と僕
が言つたら、おさうさんが「早く間伐して細材を取る目
的のところでは、一坪に二本も三本も植ゑるが、此の邊
では太材を取る方が利益だから、かう間をおいて植ゑる
のだ。今に御覽、此のくらゐ離して植ゑても、十五六年
目には、間伐をしなければならぬやうになるから」と
言つて笑つてゐられた。植付けた苗木の枯れた所へ補植
をするのは、翌年一回だけだといふから、今年はもうし
なくともよいのであらう。下刈はいつも土用中にするの
で、すぬぶん苦しいが、それでも木が競争するやうにし
んを立てて、すくすくこのびてゐるのを見るさ、非常にう
れしい。木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに
植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こ
すゑの差が段々少くなつて行くのもおもしろい。毎年春
の初か冬の半ばにする枝打はおもしろいものだ。なたや
鎌で蔓草を拂ひ、下枝を伐落して行くさ、今まで兩方の
枝と枝と組合つてゐたのが急に間がすいて、如何にも氣
持よさうに見える。だからいつかもしいさんが「杉の
散髪だ」と言つて、みんなを笑はせられたことがある。
おさうさんのお話によるさ、枝を打てば、山火事の危険
を防ぎ、又空氣の流通がよくなつて、蟲がつかなくなるさ

うだ。それから始めて聞いておもしろいと思つたのは、
枝打をしないさ、木に節が出来ることである。生きた枝
でも枯れた枝でも其のまゝにして置くさ、木が太るにつ
れて、其の枝を包んで行くために、其處が節になるのだ
さいふ。僕がお手傳して植ゑたあの杉や檜は、いつにな
つたら伐るのだらう。使ひ途によつて、三十年目から五
六十年目ぐらゐの間に伐るのださうだから、一番早く伐
るさしても、其の時は僕はおさうさんぐらゐの年になつ
てゐるわけだ。今年伐るはずのは、おさうさんの子供の
時植ゑたのださいふが、もう幹のまはりの三尺餘りもあ
るものが大分見える。おさうさんはよく「植林は貯金の
やうなもので、植ゑてさへおけば、年々太つて利息が附
いていく」とおつしやるがほんさうにさうだ。ほんやり
いろ／＼の事を考へてゐるうちに、いつか夕方の色が四
方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色に暮れていく。あ、
西の空がほんのり明るい。明日は晴かも知れない。(全
文)(六二頁―六八頁)(挿繪―杉の枝打の圖)

第二十二課 日本三景

殿島 天の橋立 松島 (一〇〇頁)

第二十六課 夏休みの通信

柿の木(一一七頁)

第二十八課 廢兵院

(上略)廣い道路の上には、美しい楓の枝がトンネルを造つて、(下略)(一三〇頁)

大きなピアノ・テーブル・玉突臺(一三六頁)

第三十二 明治神宮參拜

鳥居。白木造(一五三頁)

紅白の萩(一五五頁)。 獻木(一五六頁)。

尋常小學讀本 卷十二 (第六學年兒童用)

第二課 我が南洋

(上略)植物は、十分な熱と光と水分によつて、思ふ存分に成長する。其の中で最も目につくものは、コ、椰子とパンの木である。コ、椰子は、大きなものになる。高さ十四五間もあつて、幹の上方は大きな羽状の葉が集つて附いてゐる。其の葉の根本には大人の頭ぐらゐもある實が鈴なりになつてゐる。此の實の中には固い殻があつて其の内部に白い肉のやうなものがある。これを乾固めたものはコブラといつて、椰子油の原料となる。椰子油はシヤホンやらふそく材料として用ひられる。まだ十分に熱さない時は、中の肉が透明に近い液で、これがなが

くうまいものである。パンの木も到る處に美しい林を作り、一年の中ほとんど七八箇月の間は、常に實を結んでゐる。實の大きさは子供の頭ぐらゐもあつて、土人の食料として最も大切なものである。彼等は其の肉を蒸焼にしたたり、又は餅についたりして食ふ。味は大體さつまいもに似てゐる。(五頁一七頁)

(上略)即ち家は大てい椰子の葉でふいた獨立小屋(下略)である。舟といつてももとより丸木舟に過ぎぬが、それでも大きいものなる。数十人もの事が出来る。一方の舟はたから長い腕木が出てをり、其の端に船體を並行してうきが結びつけてあるから、簡單なものではあるが決してくつがへらない。(下略)(八頁一九頁)

(挿繪)コ、椰子・パンの木の實、丸木舟を操る圖

第四課 天氣豫報及び暴風警報

(上略)東京に中央氣象臺、神戸に海洋氣象臺、茨城縣の館野に高層氣象臺あり。又測候所は、(下略)(一六頁)

第五課 辻音楽

バイオリン(二二頁)。 弓(二二頁)

第七課 森林

一、こずみくをゆり動かして、風、東よりさき来れば、葉末々の露きら／＼と、光りて落つる曉の森林。
二、小鳥の群はねぐらを出でて、清き泉にのんごうるほし朝日きらめく枝に居並び、 胸毛そよがせ喜び歌ふ。
三、茶をになへる仙人二人、 細道傳ひ、よざりし彼方、きゝと叫びて小猿逃ぐれば、木の實こぼる、晝の森林
四、木の間に白き湖染めて、 深紅の太陽、西に沈めば雲はしづ／＼谷より出で、 峯を取巻き、木立を包む。五葉末ふるはし鳴ひぐらしの、 聲一しきり止みにし後をまた／＼星に夢護らせて、 靜かに眠る夜の森林。
(全文)(三〇頁一三二頁)

第八課 ヨーロッパの三大都

(上略)パリは人口二百九十萬(中略)高屋相並び、街路樹枝を交へて、雅麗比なし。(下略)(三四頁)

第九課 水郷の秋

櫓(三八頁)。 白楊(四三頁)。

第十課 日光の杉並木

我が國には到る處に並木がある。或は街道に立連なるもの、或は社寺の參道に並ぶものなど、何れも捨難い趣がある。さうしてそれらの並木の中には、數百年も前から

其の地に立つて、人の世の幾變遷を眺めて來たものもあらう。殊に日光街道の杉並木の如きは、其の樹齡に於ても、其の延長里程に於ても、これに匹敵するものは世界中にも少いといはれてゐる。もつとも日光には古くから二荒神社があつて、東照宮の出来る以前、既に道筋に杉を植ゑたことがあるといふやうな話も残つてゐる。けれども今日汽車の窓から見るやうなあのりつばな杉並木は決して其の時からのもではない。東照宮の出来た時、大名は皆争つて高價な燈籠などを獻じた。ところが其の中に、一人全然變つたものを獻じた人がある。それは松平正綱といつて、幼少の時から家康に仕へ、東照宮の造營にもたづさはつた人である。正綱は主君に受けた厚恩を、其の死後までかうして仕へるといふくしき因縁に感激したのか、永遠に意義あるものを獻上したいと考へて、遂に杉並木を作ることにした。出来上つた並木は日光山内から始つて今市に到り、此處から北・東・南の三方に分れ、總延長十餘里に及んだ。正綱の建てた碑の文によると、此の並木を造るには、實に前後二十餘年の歳月を費したといふことであるから、其の苦心もなかく一通りではなかつたであらう。それから約三百年、其の間にはすぬぶんびごい風雨にも會つたであらうが、成長

するに随つて隣りあふ木と木は、二本、三本、多きは七本、互に根本が密着して一本の姿となり、容易に倒れないやうになつた。此の天を摩するやうな大木が幾百本。幾千本と立續いてゐる様は、稀に見る偉觀である。かくて日光杉並木の名は、華麗目もまばゆき彼の殿堂と共に今は世界の一名物として知られてゐる。(全文)(四六頁—四九頁)

(挿繪—日光街道の杉並木)

第十七課 一年の折々

松の内の七日(七七頁)。梅の花。桃の咲く頃(七八頁)。彼岸櫻(七九頁)。

第十九課 雪

街路樹(八五頁)。らてふ(八六頁)。

第二十二課 南滿洲鐵道

(上略)長春ハ南滿洲鐵道ノ終ルトコロ(中略)商業上ニ於テモ重要ナル位置ヲ占メ、農産物・木材等ノ一大集散地タリ(下略)(九八頁)
(上略)安東ハ新義州ト共ニ、鴨綠江流域ノ森林ヨリ伐出ス木材ノ集散地ニシテ(下略)(一〇〇頁)

第二十六課 鎌倉

大さつふ(一一四頁)

第二十七課 飛行機

(機體及びプロペラの用材に就て解説)(一一七頁)

尋常小學國語讀本 (自卷一—至卷十二)

●尋常小學國語讀本 卷一 (第一學年兒童用)

一頁—十六頁

ハナ。マス。カサ。カラカサ。モノサシ。ヒノシ。
カキノタネ。メ。キ。クリ。ウス。
四十頁—四十五頁
モリ。スギノキ。ヤナギノキ(シダレヤナギ)。
マツノキ。モモ。

●尋常小學國語讀本 卷二 (第一學年兒童用)

四 ウシワカマル

ナギナタ (一一頁)

五 カンガヘモノ

木ノエダニ、コトリが十バトマツテキマシタ。(一三頁)

八月

(上略)月ガテハジメマシタ。マツノ木ノアヒダガ

ダンダンアカルクナツテキマス。(中略)コチラノク
ライモリノ中ニミエルノハ、ドコノウチノアカ
リテセウ。(一八頁—一九頁)

九 クリヒロヒ

コノ山ニハ、クリノ木ガタクサンアリマス。ユフベ
カセガフイタカラ、キツトクリガオチテキマス。
サガシテミマセウ。(下略)(二〇頁)
(挿繪—栗林と栗の實さいがの圖)

十 木ノハ

(尋常小學讀本卷二 第九課「木ノハ」参照)(二二頁)

十三 オ正月

(上略)「オ正月ノオカザリニハ、ドンナコトヲシマ
スカ」カドマツヲタテマス。(下略)(三一頁)

十四 モチノマト

ユミ、ヤ(三三頁)

十五 ユキ

マツノ木ノエダニ、タケノハノ上ニ(三八頁)

十六 ユキダルマ

(上略)ユキテウサギヲ コシラヘテイタダキマシタ。耳ハナンテンノハデ、目ハナンテンノミデス。アカイ小サナ目テカハイラシウゴザイマス。(下略)(四〇頁)

十七 ハナサカヂヂイ

(尋常小學讀本卷二 第二十三課「ハナサカヂヂイ」参照)(四一頁)

十八 カゲエ

(上略)「ハイ、コレハセンドウサン、ナガイ竹ノサヲテフネヲコギマス。(下略)(五六頁)

二十三 コレカラ

ダンダンアタタカニナツテキマシタ。ウメノ花ガサキ出シマシタ。(中略)(六七頁)

二十四 ヒカウキ

サクラガサクノハコレカラデス。(下略)(六八頁)

●尋常小學國語讀本 卷三 (第二學年兒童用)

一 イマハ

サクラ(一頁)

八 わらびとり (二十頁)

(尋常小學讀本 卷三・第三課 参照、但し本章は平假名交り文にして小學讀本とは異なるも大差なき故、略す)。

九 竹の子

この二三日の雨で、竹の子がこんなに出来ました。むぐらもちでもさほつたやうに、土がさころころもち上つてゐます。そこから竹の子が出るのです。このあひだかきねのそばへ出たのは、もう私のせいより高くなりました。かうのびてはさてもたべられませぬ。

石がきの下へ出たのは、かはが おちはじめで、竹になりかかつてゐます。あれはいまにさを竹にでもなるのでせう。

又あそここにわらをむすびつけてあるのはほりさらないしるして、のびしておや竹にするのださうです。むかふの方に、二本ならんでゐるほそい竹の子は、いまに竹になつたら、おぢいさんに、あれで竹うまをこしらへていただく、つもりです。(全文)(二五頁―二八頁)

(挿繪―男の兒が笥さ丈比べをしてゐる圖)

十一 五一ぢいさん

二十六 はごろも

はごろもの松(羽衣の松)、みほの松原(八二頁)

●尋常小學國語讀本 卷四 (第二學年兒童用)

一 お祭

うぢがみさまの 森で(下略)……社(一頁)

二 柿

私のうちには柿の木が五本あります。しぶ柿が三本、あま柿が二本で、その中に私の木が一本あります。これは私が生れた年、おぢいさんが私のぶんにつき木をして下さつたのださうです。(中略)今年には柿のあたり年で、どの木にもよくみかなりました。(下略)(四頁―七頁)

(挿繪―柿の臺接の圖)

四 麥まき

ならやくぬぎのはは黄にそまり、廣いたんぼに北風あれる。(下略)(一〇頁)

六 をぢさんのうち

(上略)とだなからうでたくりをおぼんに一ぱい持つて来て下さいました。

水車(三一頁)。

十二 右下左

ハシ(箸)(三五頁)

十八 をののたうふう

(上略)しだれやなぎのえだへ、かへるがさびつかうさしてゐます。(下略)(五五頁)

十九 セミ

モノノ木(五七頁)。

二十 ささ舟

(上略)男の子三人はささのはなをさつて 舟をこしらへました。(下略)(六一頁)

二十一 水デツパウ

私ノウチヘキノフヲケヤガ來テ、手ヲケヤタラヒノタガヲカケカヘマシタ。アトヘ竹ノキレヲノコシテ行キマシタガソノ中ニフシガ一ツアツテ、水デツパウニナリサウナノガアリマシタ。(下略)(六五頁―六六頁)

二十五 ふじの山

あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして、かみなりさまを下にきく、ふじは日本一の山。(下略)(八〇頁)

前の島の柿の木は、はがまつかになつてゐて、二つ三つさりのこしてある柿が、赤い玉のやうに光つてゐます。えんさきのさざんくわに、目白が二は来てゐて、枝から枝へ喜んでゐます。(下略)(二二頁―二四頁)

九 フクロウ

(上略)森ヤ林ノヒクイ木ノ枝ニトマツテ、ボンヤリトシテ居ルコトガアリマス。(下略)(三五頁)

十一 すずはき

しやうじ。からかみ。いた。火ばち。机。本籍。たんす物さし。つづら。長持(四二頁)。(戸だな)(四二頁)

十四 お話(二)

東京の宿屋で、山國のものさ、島國のものがおちあひました。山國のものが、「日は山から出て、山へはいる」といへば。(下略)(五三頁)

十五 しひの木とかしの實

思ふぞんぶんはびこつた、山のふもこのしひの木は根もさへ草もよせつけぬ。山の中からころげ出て、人にふまれたかしのみがしひを見上げてかういつた。「今に見てゐる、僕だつて、見上げるほどの大木になつて見せずにおくもの

か。何百年かたつた後、山のふもこの大木は、あのしひの木かかしの木か。(全文)(五五頁―五七頁)

十六 大工小屋

フシン(普請)。板(五八頁)。ツミ木(六〇頁)。

十七 扇のまと

(上略)見ればへさきに長いさを立てて、其のさをの先には、ひらいた赤い扇がつけてあります。……弓、矢(六一頁)。

十八 山がら

かご、竹がき(六九頁)。

二十 一本杉

私は道ばたの一本杉です。もう二百年あまりもここに立つて居ます。(中略)私は長生をして居ますので、東の村や西の村に、人が生れたり、死んだり、家がたつたり、こはれたり、火事があつたり、水が出たりしたことをみんな見て知つて居ます。(下略)(七一頁―七四頁)

(挿繪―一本杉の圖)

二十一 汽車のたび

ほばしら(八二頁)。

二十二 ヒナマツリ

モモノ花。弓。矢。扇(八四頁―八六頁)。

二十三 春が来た

山。野。里(八八頁)。

●尋常小學國語讀本 卷五 (第三學年兒童用)

二 中村君

(上略)中村君がこれまで居た所は日本の南の方で、冬でもめつたに雪のふることがなく、うめやさくらも、こちらよりはすつき早くさくさうです。(下略)(五頁)

三 大蛇たいぢ

(上略)川上から簪が流れて来ました。(八頁)
(中略)「頭が八つ、尾が八つある大蛇で、目はほほづきのやうに赤く、せ中には、ひのきや杉の木が生えてゐます」。(下略)(一〇頁)

九 私のうち

(上略)庭さきのもみぢの木は前の川に美しいかけをうつしてゐます。うら一めんの林は私のうちのものです。此のころは栗の花がたくさんさいてゐます。(下略)(二八頁)

もえる木のめに春風吹けば、うちのまはりのうめ。もも。さくら、かはるんくに花さきみだれ(下略)(二九頁)

十 遠足

(上略)平尾山のすそへ行くさ、わらびやぜんまいが、すつかり葉になつてゐました。(三五頁)(中略)八幡様の高い石だんを上りつめた所に、しめをはつた大きな杉の木がありました。御神木ださうです。私どもが六人で、やつさかへました。「さしわたしが八尺もある」と先生がおつしやいました。(下略)(三九頁)

十五 養老

(挿繪―わらび。ぜんまいの葉)

十六 日本三景

昔美濃の國にまづしい人がありました。山から薪を取つて来て、それを、賣つてくらしを立て、ゐました。(下略)(五三頁)

いて、其の上につんであります。(下略)(二頁)

第二 日本の高山

「朝晩めつきり寒くなつた。高い山はもう雪だらう」「に
いさん、富士山はまつ白でせうね」「さうさ、中ほごま
では降つてゐるかも知れない。何しろ一萬二千五百尺も
あつて、内地第一の高山だから」「それでは日本一の高山
は」「臺灣の新高山さ。これは一萬三千尺からある。臺灣
ではめつたに雪が降らないさうだが、それでも此の山に
は、時に雪を見るこゝがあるさいふことだ」「一番は新
高山二番は富士山、三番目は」「いや、二番も三番も臺灣
にある。富士山は六番目だ」「富士山の次は」「内地では
甲斐の白根で、一萬五百尺」「其の次は」「信州の槍ヶ岳や
赤石山で、これも一萬尺以上ある」「外國には、新高山よ
り、もつと高い山がありますか」「印度のヒマラヤ山は
世界一で、たしか三萬尺近いさおほえてゐる。しかし三
耶、高い山がかならず名高い山だとは、かぎらない。奈
良の春日山や三笠山は千尺そこそこだが、白根や槍ヶ岳よ
りも知られてゐるし、京都の東山にしてもさうだ。
ふさん着て、れたるすがたや東山。

で、先づ高い岡だと思へばよい」「高くて名高いのは、
どの山ですか」「それは富士山さ」(全文)(四頁―八頁)

(上略)松島は大小二三百の島が、海上三四里の間にちら
ばつてゐて、島さいふ島には、枝ぶりのよい松がしげつ
てゐます。(五六頁)(中略)天の橋立は海中へつき出た細
長い洲で、長さは一里、はゞは四五十間。其の洲の白い
砂の上に、青い松が一面に立つてゐて、長い橋のやうに
見えます。(下略)(五七頁)

十八 峠から町へ

(峠の解説)

十九 用水池

(上略)其の杉山なんぞは、木もろくにない草山だつた
さいふことだ。(下略)(六八頁)

此の山の杉も庄屋が先に立つて植ゑたのださうだ。
昔の貧乏村は、今郡の中でもゆびをりの金持村だと言
はれてゐる。(下略)(七八頁)

二十四 ブドウ

ブドウ棚(九六頁)

尋常小學國語讀本 卷六 (第三學年兒童用)

第一 俵の山

(上略)俵の山が出来てゐます。うちでも土間に丸木を置

第四 きのこと取

(尋常小學讀本 卷八 第三 だけがり参照)

二三日降りつゞいた雨がからりさされたので、昨日のお
晝すぎ、にいさんさきのこ取に行きました。松山の入口
で、赤くなつてゐたぐみを一枝折るさうそんな大きな枝
を「さにいさんに注意されました。

僕がぐみをたべてゐる間に、にいさんは初茸を五六本取
つたやうでした。僕が紅色のきれいなきのこを取つて、
にいさんに見せましたら「あ、それは紅茸だ。毒だよ。
其の手でぐみをたべてはいけない」さ、にいさんが言ひ
ました。僕はびつくりして、ぐみも紅茸も地面へなげつ
けました。それからにいさんと、さふ木林へはいつて、
じめじめした落葉をふんで、ねずみ茸を少し取りました。
だん／＼上つて行くさ「山の中でも、三軒家でも、住め
ば、都よ、わが里よ」木びきの力藏さんがうたをうたひ
ながら、大きなのこぎりで板をひいてゐました。何の木
か、おがくづが大さうよくほつてゐました。にいさん
が「今日は」さ言つて「此の近くに、しめじの出る所はあ
りませんか」さたづねますさ「さあ、まだ早いかも知れ
ないがね」さ言つて、栗林の下のくぼ地を教へてくれま
した。行つて見ますさ、なるほど少し早すぎましたが、

それでも、小さなしめぢが列を作つて出てゐました。ふ
まないやうに注意して、かご一ぱい取つて歸りました。
歸りがけに、力藏さんに御禮を言ひましたら「一雨降つ
たら、又お出で」さ言ひました。(全文)(一四頁―一九
頁)

(挿繪)初茸、ねずみ茸、しめぢ茸の圖

第七 霜

(上略)庭の菊も白い花びらに赤みがさして來た、霜にあ
たつたからだらう。うめもどきの實がいつもより目立つ
て見える。(二六頁)

第十 弓流し

弓。熊手。(三五頁)

第二十四 記念の木

村の學校のげんくわんの、向つて右の落葉松は、わたし
の子どもが植ゑたので、其の子はさうに戦死した。あの
學校がたつた時、うちの島にあつたのを、死んだあの
子が掘取つて、かついで行つて植ゑたのだ。あの子は十
二、落葉松は、あの子のせいより低かつた。それが今で
は學校の、二階のまごにさゞいてゐる。あの子がいくさに
行く時に、學校の前でふりかへり、「わたしの植ゑた落葉
松があんなに高くなりました」昨日學校で校長に、あの

木の事を話したら、はじめて聞いた記念の木、大事にするさおつしやつた。(全文)(九八頁—一〇〇頁)

第二十六 伊勢参宮

(上略)千年もたつたかと思ふ老木の下へ行つた時には、何さなく心持がかはつて、一そうありがたくなつた。(一〇四頁)

白木造。かつき木。千木(一〇六頁)。

●尋常小學國語讀本 卷七 (第四學年兒童用)

第七 傘松

村の西にくぬぎ林がある。それを通りぬけて四五町上るま、道ばたに大きな松が一本ある。みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。(下略)(一二頁)

(挿繪—傘松の圖)

第十二 大連だより

(上略)通は廣くて平で、歩道と車道の間には並木が植ゑてありますが、此の頃は其の葉の美しいさかりです。(下略)(三五頁)

第十七 安倍川の義夫

繪(六五頁)。

●尋常小學國語讀本 卷八 (第四學年兒童用)

第一 山の秋

秋は山が美しい。此の間二三度降つた雨に、山の木の葉は目立つて色づいた。黄色なのはならやくぬぎで、赤いのはかへてや櫻やぬるでである。林の中へはいると、真赤になつたつたが、松の木にからまつてをり、日當りのよい所には、つるうめもどき が美しい實をならべてゐる。(中略)栗のいがのふむのも今である。きのこのむらがつて出るのも、しひの實が落ちて、くぼたまりにころがり合ふのも今である。炭を焼く煙も所々に立ちはじめた。うさぎの毛も間もなく白くなるだらう(二頁—三頁)

(挿繪—小鳥類・ならぬるで・くぬぎ・つるうめもどきの圖)

第五 揚子江

(上略)此ノ河ノ上流地方ヨリ木材ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河ヲ下スコトアリ。イカダノ大ナルモノハ長サ六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ置キテ野菜ヲ作り又、小屋ヲ建テテ豚、雞等ヲカヒ、一家コトゴトコレニ乘リテ、流ニシタガヒテ下ル。其ノ家ヲ出テテヨリ、

イカダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、一年ノ長キニワタルコト珍シカラズトイフ。(下略)(一九頁—二二頁)

第六 吳鳳

阿里山(二二頁)。

第九 炭 焼

太郎は毎日炭を焼く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其所へ行つて見たことがない。或日、炭を焼く男が太郎のうちへ来て、ゐろりのはたでいろ／＼の話をした。此の時、太郎が炭はどうして焼くのかさきく、其の男はていれいに教へてくれた。「炭を焼くかまを造るには、はじめ石と土とでかまの腰だけをきづいて、天井は造らずにおく。腰といふのは、かまのまはりのことである。其の大きさは大ていさしたし八九尺、高さ五尺ぐらゐで前の方には、たて四尺四五寸、よこ一尺二三寸のかま口を造り、後の方には煙出の口を明ける。

さて山の木をきり倒して、五尺ぐらゐの長さにきりそろへ、それをぎつしりさかまの中に立て並べる。それから其の上を中高につみかさされ、又其の上になつた土を置いて打固めると、天井が出来る。次にかま口から火をつけて、四五日の間、中の木を焼く。さうして煙の色で焼け加減を見て、かまの外にかき出し、しめつた灰を

かけてけすさ、かた炭が出来上る。かまは一度造つておけば其の後いく度も使へるのである。

炭にはかた炭の外に土がまさいふものがある。これは土ばかりで造つたかまの中で焼き、火がきえてから取出したものである。(全文)(二九頁—三二頁)

第十 朝鮮人參

山野に生ずる草木の中には、薬用にするものが多くありますが、其の中貴重なもの一つは朝鮮人參です。(下略)(三二頁)

(挿繪—朝鮮人參の圖)

第十六 看 板

下駄(五八頁)。蠟燭。櫛。扇(六〇頁)。

第二十 税

國稅。縣稅(七七頁)。

第二十六 分 業

(上略)材木を機械にかけて軸木をこしらへてゐる者もあり、(下略)(一〇四頁)

分業はマツチの製造ばかりではない。うちをは造るにしても、時計を造るにしても、家を建てるにしても、皆これによるのである。(下略)(一〇六頁)

尋常小學國語讀本 卷九 (第五學年兒童用)

第一 今日

(上略)夜まはりの拍子木のごさかちく(下略)(一頁)

第二 トラツク鳥便り

(上略)内地から来て先づ目につくのは植物で、其の中でも殊に珍しいのはコ、椰子の木やパンの木などです。コ、椰子は、高いのは十四五間もあります。鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上方に集つてついでをり、其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐの實がすゞなりになつてゐます。實の中にはかたい殻があつて、其の内がはに白い肉のやうなものがあります。これから椰子油を取り、石鹼・蠟燭などを造るのださうです。まだ十分にじゆくしてゐない實は、中にきれいな水があります。これがなか／＼うまゐもので、私たちもよく取つて飲みます。又パンの木も所々に美しい林をつくつてゐます。其の實は土人の一番大事な食料で、焼いて食べたり、餅にして食べたりします。味はまごころにあつさりしたものです。珍しい植物は此の外にもまだたくさんあります。これ等の植物が思ふまゝに茂つてゐる様子は實に見事です。殊に毎日のやうに降るにはか雨が、非常な勢で木を洗ひ(下略)(四頁)

七頁)

(挿繪)コ、椰子林及び其果實・並にパンの木の果實)

柿の木、きりの木(一一頁)

三四

第四 養 雞

第八 若葉の山道

だら／＼坂を登りきると、道は低いみれづたみになる。何時もはうす暗い程茂り合つてゐる兩がはの木立も、まだ若葉だけに、下草まで見えるぐらゐ明るい、其所の木のかげ、此所の石のそばには、やぶかうじの赤い實に並んで、春蘭のつぼみのふくらんだのも見える。(三二頁)

第十 水師營の會見

(中略)若葉のにはひがひし／＼と身にせまつて来る。うす紅のかへて、銀れすみ色の箱、黄の勝つた緑のけやき、ごの木を見てもなつかしい。(下略)(三四頁)

第十四 麥 打

穀筆(五九頁)

第十五 軍艦生活の朝

甲板。洗刷毛。煙草盆。(六五頁)

第十六 東京から青森まで

「此の邊が有名な那須野が原だ。昔は一面の荒野であつたが、今は方々に町や村が出来てゐる。紅葉と温泉で名高い鹽原へ行くには、此所で下りるのだ。(下略)(六八頁)

岩手山(南部富士)(七三頁)。

第十八 石安工場

石屋の樋の解説(八一頁)。

第二十 白馬岳

(上略)白馬岳が飛驒山脈中の有名な山だといふ事は知つてゐましたが、くはしい事は今日始めてうかゞひました。中でも面白かつたのは大雲漢のお話です。雲漢は谷を埋めた雪の坂で、ふもとの村から三里ばかり登つた所から始つて、頂上近くまで續いてゐます。幅は二三町、長さは一里に近く、行つても行つても眞白です。雲や霧がわいたかと思へば散じ、散じたかと思へば又わいて来て、時には一寸先も見えないやうなことがあります。登山者にはかんじきをはいて、石づきの付いた金剛杖や鷹口を方に、此の坂を登るのです。眞夏の日中でも、杖を握つてゐる手などは、何時の間にかつめたくなつてしまひます。下山の時には、着ごさなどを橋にして、此の雪溪を

すべつて下る人があります。僕も其の通りにして見ましたが、急な坂を矢のやうに早くすべるのですから、實に壯快でした。それから、お花島のお話も面白うございしました。「お花島は雲漢を登りつめた所にあります。雪溪が冬の世界ならば此所は春の國でせう。いろいろの珍しい高山植物が紅・黄・紫と咲亂れて、何さといはれない美しさです。あの雷鳥といふ珍しい鳥も、此のあたりから頂上へ登る途中のはひ松の間に居るのです」。

さ言つて、岡田さんは高山植物や雷鳥の繪葉書を出して見せて下さいました。お話が頂上のながめに移ると、いよく／＼はすんで来て、岡田さんは目の前に見てゐるやうな様子で説明なさるので、僕等も何時の間にか、山のの上に居るやうな氣持になつて聞きました。

「頂上に立つて四方をながめた景色は、全く雄大です。もやの底にかすかに見える越中の平野、日本海の波の上にはるかに浮ぶ能登半島、眼前には杓子岳や鐘岳がぬつとそびえ、遠くには槍岳・穂高岳・乗鞍岳・立山・劍岳・白山など、いづれおさらぬ高山が、南から西へ連なつて互に雄姿を競つてゐます。淺間山は煙をなびかせて、東南の空はるかにそびえ、戸隠連山は東北の方に、呼べば答へるばかり近くそばだつてゐます。富士山も、晴れた日に

は、白雲の上にかすかに見える事があるさうです。」(下略)(九三頁—九八頁)

(挿繪—雪溪の圖)

第二十一 初秋

柿の木。きのこ(一〇一頁)。

●尋常小學國語讀本 卷十 (第五學年兒童用)

第一 明治神宮參拜

(上略)先生の説明によれば、當社の用材は主として木曾産の楠なりとぞ。(二頁)

(下略)此の境内は廣さ約二十二萬坪、舊御苑と舊御殿の邊さをのぞきては立木きはめて少かりしかば、新に植込みたる木の數、實に十萬餘本に及べり。大方は國民の眞心こめたる獻木にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。(下略)(六頁)

(挿繪—明治神宮神域略圖)

第五 燈臺守の娘

船。ボート。オール(二四頁)。

第八 開墾

村はづれにある、うちの難木山を開墾し始めてから、も

う一月餘りになる。(中略)かり取つた難木、切倒した

大木、堀起した木の根や石ころ、まだあらごなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有様である。(下略)(三八頁)

(挿繪—森林開墾の圖)

第九 陶工柿右衛門

柿の木 木立(四四頁)。

第十二 鉢の木

梅・松・櫻の鉢植(六六頁)。

第十五 輸出入

(木材及び林産品の輸出入量の解説)(八五頁)

第十六 登校の道

(上略)こすゑ明るき林を行けば、やぶかうじの實、木の根に赤く、霜柱たつやぶかけの路。(下略)(八八頁)

第十九 温室の中

(上略)次の室には大きい熱帯植物類が並んでゐる。椰子バナナ・コーヒ・ゴムの木などは名を聞いてゐたが、實物を見るのは始めてである。(下略)(一〇三頁)

第二十一 日光山

二荒山の山も、木深き處、大谷の奔流岩打つほざり。

(下略)(一〇頁)

第二十三 太宰府まうで

(上略)何百年も経たであらうと思はれる櫻の大木が茂り合つてゐる。(一七頁)(中略)社殿の後に廻ると、其處は廣々とした梅林で、幾百本とも知れない古木の梅が咲續いてゐる。白梅は今ちやうど眞盛りであるが、其間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。(下略)(一一八頁)

野梅(一一九頁)

(挿繪—太宰府神社境内の池・太鼓橋附近の景)

第二十五 平和なる村

(上略)青年團の事業の一として、杉・楠の植林を營めり。其の利益は、大部分を學校の基本金とし、其の殘部を一村共同の有益なる事業の費用にあつる計畫なり。(下略)(一二五頁)

第二十七 兒島高德

大いなる櫻の幹をけづりて(一三二頁)

●尋常小學國語讀本 卷十一 (第六學年兒童用)

第五課 のぶ子さんの家

たんす。戸棚(一四頁)。

第七課 賤嶽の七本槍

つゝじの枝(三一頁)。

第九課 植林

(尋常小學讀本卷十一、第十四課、植林と同文につき略す)

第十課 手紙

葛粉(四二頁)。

第十一課 畫師の苦心

筆。杉戸(四八頁)。

第十二課 ゴム

自動車・自轉車のタイヤ・ゴムまり・ゴム人形・消しゴム・ゴム靴・ゴム管・ゴム風船など、數へてみるにゴムの造つたものは實に多い。一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

ゴムは、熱帯地方に産する或植物から出る白色の液を原料として、製造したものである。此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出した

ので、パラゴムの名が生じたわけである。

ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をさるのであるが、近年ゴムの需要が激増したために、英國人はマレー半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。他の國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。マレー半島・蘭領東印度等には、日本人の經營してゐるゴム園もたくさんにある。

此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を焼拂つて、其のあまに種をまくが、又は苗木を植付けるのであるが、これが成長して、切付を行ふまでには五六年もかかる。其の間草をさつたり、虎や象の荒しに來るのを防いだり、苦心はなかく一通りでない。切付といふのは、ゴムの木から液をさるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。切付には餘程熟練を要する。元來ゴム液、は幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るものであるから、此の組織の所まで小刀が届いてしかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。此の傷から出て來るゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

ゴム園の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をして廻る。それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集めて歩くのである。集めた液は之を工場に持つて行き先づこして不純な物を取除き、次に薬品を入れて固まらせ、機械で薄くして乾かすのである。

こゝまでが原産地における仕事である。かうして出來たゴムは各國の工場に運んで加硫法を行ふ。加硫法とはゴムに硫黄をませる事で、かうするゴムが非常に弾力を増して來る。之をそれ／＼用途に應じて、更に加工するのである。電氣の機械や、萬年筆の軸などに用ひるエポナイトといふものもゴムから造る。近來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。ゴムの用途は年を追うて益々廣くなるばかりである。(全文)(四九頁―五四頁)

(挿繪)パラゴムの樹の果實つき小枝、採液切り附けの状況)

第十四課 北海道

札幌

札幌に來て先ず感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。(中略)主な通にはアカシヤの並木が青

々々茂つてをり、(下略)(五九頁)

狩勝の展望、密林(六一頁)

第十五課 人と火

「人は火を用ひる動物。」といはれてゐるやうに、火を使用するは人類ばかりで、他の動物には見られない所である。一體人は最初どうして火を得たであらうか。思ふに落雷の爲に樹木が燃えたり、密生した樹木の枝と枝とがすれあつて起つたりした自然の火から、火種を取つたものであらう。其のうちだん／＼人智が發達するにつれて、木片と木片をこすりあはせて火を得る法をささるやうになつた。

それから少し進むと、石や金を打ち合はせて火を出す法を考へるやうになつた。(中略)マッチは今から約百年前に發明されたものである。

(中略)木炭や石炭ガスの火は、部屋を暖めたり、物を煮たりするに用ひられ、石炭の火は木炭の火よりすつと熱度が高いので、汽車や汽船や工場の重い機械を動かすのに大切なもとなつてゐる。

燈火としては、初め松の木や魚獸の油などをたいたのであつたが、其の後ちろそくや種油がさもされ、石油ランプやガス燈が之に代り、今は電氣を利用した電燈が使は

れるやうになつた。(下略)(六六頁―六八頁)

第十九課 我は海の子

樽。櫻(八一頁)。

第二十一課 曆の話

團扇(八八頁)。

第二十二課 リンカーンの苦學

木のシャベル(九七頁)。

第二十三課 南米より

(四)森林地開墾の様子を視察致居候ため、しばらく無沙汰に打過ぎ候。ブラジルは何處へ参りても果なき原野と森林とに候。原野は大てい牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。かゝる處にても日本人が盛に開墾に従事致居り、其の有様は如何にも男らしく勇ましきものに候。先づ柄の長さ一間もあるなたにて灌木を伐拂ひ、次に之を振るつて大木を伐るに、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを打つて倒る様、壯快言語に絶し候。伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、さて四方より火を放てば、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。燃えあまは取片附けて鳥さし、コーヒー。わたの

木などを植付け申候。(下略)(一〇七頁—一一〇頁)
(挿繪—伐木の圖)

第二十四課 孔明

机(一一一頁)。

尋常小學國語讀本 卷十二 (第六學年兒童用)

第一課 明治天皇御製
櫻がり(三頁)。

第二課 出雲大社

(上略)やがて打續く松並木の間を過ぎて境内に入り、先づ拜殿の前にゆかづく。(下略)(五一頁)
千木。(七頁)

(上略)寶物殿に入りて拜觀するに、火きりぎね火・きりろすさいふものあり。太さ中指ほごなる細長き棒さ、幅四五寸長さ三尺ばかりの厚板さなり。此の棒を此の板の上にてきりをもむ如く廻せば、摩擦によりて火を生ず。此の社にては、今も太古の法に従ひ、之によりて火を作るさいふ。(下略)(八頁)

第三課 チャールス、ダーウィン

古木の皮をむくさ、珍しい甲蟲が二匹ゐた。(一一頁)

第五課 密柑山

(上略)幾段にも幾段にもきづき上げられた山畑には、蜜柑の木が行儀よく並んでゐる。(下略)(二〇頁)
ごの山を見てもごの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。(二二頁)

第七課 鎌倉

(上略)左に高き大いであ。(下略)(二六頁)

第八課 ヨーロッパの旅

(一)パリーから(上略)世界最美の街路さいはれてゐるシヤンセリセーの大通には、五六層もある美しい建物が道路の兩側に並び、車道と人道との間には、緑したる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。(下略)(三一頁)

(三)ベルダンからあ、此のむざんな光景を御らんさない。山も森も皆焼野が原と變つてゐます。(下略)(三三頁)

(五)ジュネーブから湖畔に連なる緑樹、白壁、はるかに紺青の空にそびえて雪をいたゞくアルプスの連峰。久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、如何にも心地よく眺められます。

第十課 我が國の木材

我が國に産する木材は其の種類頗る多し。今其の主要なるものを擧ぐれば、杉・檜・もみ・つが・ひば・松・落葉松・けやき・栗・かしは・くぬぎ等なり。凡そこれ等の木材は、其の有する性質によりて各種の用に供すべく、隨つて何れも重要ならざるはなければ、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。殊に杉は人爲によりて容易に増殖せらるゝ點において檜にまさり、其の需要の多きこと我が國の木材中第一位にあり。家屋・橋梁・船舶・電柱より桶・たる・曲物の類に至るまで、一として杉を用ひざるなし。然れども材の優良にして美麗なるは檜を以て第一とすべし。光澤と香氣とを有し、ねばり強くして、割れ、その等の憂極めて少く、又よく濕氣に耐ふるが故に、建築材として最も重んぜらる。唯杉に比して産額少く、増殖や、困難なるは惜しむべし。

力有し、松と落葉松とは弾力に富む等、各其の特性を具へたり。
けやき・栗・かしは何れも甚だ堅く、もくめ、こまやかなり。中にもけやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生じ、又くるひ少きが故に裝飾材として珍重せられ、栗は耐久・耐濕の性に著しきを以て、家屋の土臺・鐵道のまくら木等の用に供せられ、かしは最も堅くして弾力に富むが故に、樽・車・運動器具の如き強烈なる力を受くるものを製作するに適せり。かしは又なら・くぬぎと共に薪炭材として重要なものなり。杉は吉野杉・秋田杉を以て第一とし、檜は木曾産の聲響高く近時臺灣阿里山の檜また有名なり。ひばは津輕半島に最も多く産す。松に至りては産地極めて廣くして、奥羽地方より九州に至るまで殆んど之を見ざる處なく、其の豊富なること我國の木材中の首位を占む。中にも南部松・日向松は良材として最も世に著る。(全文)(四五頁—四九頁)

第十九課 釋迦

杖(九二頁)。

(上略)それから釋迦はアツダガヤの綠色濃き木陰に靜座しておもむろに思をこらした。(下略)(九五頁)

第二十二課 トマス・エヂソン

(上略)机上に形珍しき一本の團扇あり。何心なく手に取りて眺めぬたりし彼の眼は異様に輝きぬ。彼の眺め入りしは繪にあらず紙にあらず、實に團扇に用ゐられたる竹なりしなり。彼は直に竹を以て炭素線を作りて實驗せしに、豫想以上の好結果を得たり。こゝにおいて彼は人を世界の各地につかはして竹を採集せしめ、其のもたらせるものに就いて綿密に研究せしが、**日本の竹**最も適當なりしかば、専ら之によりて心を製出せり。しかして其の電球は忽ち世界に廣まりぬ。(下略)(一一三頁—一一四頁)

尋常小學理科書 (自卷一—至卷三)

(振假名を附したる漢字は、教科書の元文には假名文) 字なるを本書は便宜上、漢字に直せしものなり。

●尋常小學理科書 (第四學年兒童用)

第一 さくら

櫻は大きい木になる。冬は葉がない。春になつて暖くなると、細い枝の所々から、わかい葉がわかい枝に着いて出て来る。又花がえの先に着いて出て来る。花のもしには筒のやうな所がある。この所を萼と花柄と雄蕊とが着いてゐる。又この所の所に雌蕊が着いてゐる。萼は五枚から出来てゐる。花柄は五枚ある。雄蕊は数が多い。雌蕊は一本ある。雄蕊の先の小さい袋から黄色の粉が出る。この粉が雌蕊の先に着くと、雌蕊のもしのふくれた所は實になる。(二頁)

第二 つばき

山茶はや、大きい木になる。冬も葉がある。葉は細い枝に、たがひちがひに着いてゐる。花は春ひらく。萼はおよそ五枚から出来てゐる。花柄は

およそ五枚ある。雄蕊は数が多くて、そのもしの方はたがひに、くつゝいて筒のやうになつてゐる。雌蕊は一本あつて先は三本に分れてゐる。雄蕊の先の袋から黄色の粉が出る。この粉が雌蕊の先に着くと雌蕊のもしのふくれた所は實になる。(二頁)

第五 つどじ

躑躅は小さい木である。幹は下の方から多くの枝に分れて、葉は枝の先の方に着いてゐる。花は枝の先に柄で着いてゐる。萼は五枚から出来てゐる。花柄は五枚あつてそのもしの方はたがひにくつゝいて筒のやうになつてゐる。雄蕊は五本か十本ある。雌蕊は一本ある。雄蕊の先の袋には二つの孔があつて、これから黄色の粉が細い糸につながつて出て来る。この粉は虫に着いて運ばれる。(七頁)

第六 きりの木

桐は大きい木になる。冬は葉がない。春になつて暖くな

るさ、葉が出る。又花がひらく。葉は大きくて、そのもさに長い柄があつて、わかい枝の所々に二枚づゝ向きあつて着いてゐる。葉には大きい筋が五本ある。

花は上の方の小さい枝にあつまつて着いてゐる。夢はあつく、かたくて、その先は五つに分れてゐる。花は五枚あつて、そのもその方はたがひに、くつゝいて筒のやうになつてゐる。雄蕊は四本ある。雌蕊は一本ある。桐の花は美しくて又香が強いから、虫が遠方からでも花のあるのを知つて喜んで来る。(八頁)

第二十九 きりの葉の落ちることゝ實

桐の葉は秋になつて寒くなるさ、だん／＼にちつて落ちる。これはえのもさに、はなれやすい目が出てゐて、こゝからはなれて落ちるのである。さうして落ちたあさは小刀で切つたやうになめらかである。桐ばかりではなく、種々の木の葉の落ちるときにも、同じやうな目が出てゐて、そこからはなれるのである。桐の實はかはがあつてかたい。實の中は二室に分れてゐて、室の中に多くの小さいたれがある。

種にははれのやうな廣い膜がある。秋になつて實がじゆくすき、實の皮は先から二つにさけて開く。種は風で吹きちらされて遠い所に落ちる。(四八頁)

第三十一 もみぢ

もみぢは大きい木になる。葉はえがあつて、細い枝の所々に二枚づゝ向きあつて着いてゐる。葉には幾つかの深い切れこみがある。葉は秋になつて寒くなるさ、紅色になる。さうしてちつて落ちる。そろ／＼さ寒くなつて、又日がよく當つたときは、たいさう目立つて紅色になる。急に寒くなつたり、日がよく當らなかつたときは、さう目立つて紅色にならない。

第三十八 冬の芽

實は細い枝から出たえの先に着いてゐる。めには二枚の葉のやうなものがあつて、その間に二つの種がある。實はじゆくすき、二つに分れて、ごちらにも一つの種と一枚の種のやうなものがあつて、風で吹きちらされる。(五二頁)

着いてゐる。芽の外がには、多くのかたい鱗のやうなものがあつて、中のやはらかい所を包んでゐる。このやはらかい所は春になるさ、大きくなつて、枝と葉とになるか又は花になる。

桐の枝には、葉の落ちたあさのすぐ上に茶色の小さい芽が着いてゐる。又枝の上の方には、多くの茶色の大きい蕾が着いてゐる。芽は春になるさ、枝と葉とを出す。蕾は夢で包まれてゐるのであつて、外がには細かい毛がある。

山茶や松は冬も葉がある。葉はこい緑色があつて、あつくて、かたい。山茶の枝には、葉の着いてゐる所の内がには、うす緑色の芽が着いてゐる。又枝の先の方に、うす緑色の大きい蕾が着いてゐる。松の枝の先には茶色か白い色の芽が幾つか着いてゐる。(六〇頁)

尋常小學理科書 (第五學年兒童用)

第六 桑

桑は冬の間、葉がない。春になつて暖くなるさ、若い枝

葉を出す。葉はえがあつて、互違ひに枝に着いてゐる。葉の縁は鋸の葉のやうになつてゐる。葉の形や大いさは種々である。枝には強い皮がある。花は四五月頃開く。花には雄花と雌花とあつて、たいてい別々の木に生ずる。ごちらの花も小さくて、その先に集つて着いてゐる。雄花には四枚に分れた萼と四本の雄蕊とがある。雌花には四枚に分れた萼と一本の雌蕊とがあつて雌蕊の先は二本に分れてゐる。雌蕊の先のふくらから出た粉は風に吹きちらされて雌蕊の先に着く。雌蕊は夢に包まれたまゝ實になる。實の集りは一つの實のやうに見える。

第八 松

桑は大木になる。蠶を養ふ爲に用ひるには、畑に作つて幹や枝をよい程の高さに切つて多くの若枝を出させる。その直はたい親木の枝を用ひて作る。(八頁)

松の冬をこした芽は五月頃やはらかい若枝になる。この若枝には花の着いてゐるのがある。花には雄花と雌花とがある。雄花は若枝の本の部分に集つて着いてゐて、淡黄色である。雌花は若枝の先の一つ二つ着いてゐて、赤紫色である。雄花は多くの雄蕊から出来てゐて、黄色の粉

を出すこの粉は風に吹きちらされて雌花に着く。雌花は多くの雌蕊から出来て、後に實になる。

松の實は杉穂といふ。松穂は多くの鱗のやうなものから出来て、若いときは緑色であつて、固く閉てゐるが熟するま茶色になつて開く。鱗のやうなもの、内側には種が二つづつ着いてゐる。種には一枚の翅のやうなものがある。種は風で吹き散らされる。

松の葉は針のやうな形であつて、ふつう二本づつ集つて枝のまはりに着いてゐる。

松は大木になる。幹や太い枝には、茶色の皮に覆まれて堅い木材がある。木材には年輪がある。松は傷口から樹脂を出す。

松の木材は家や橋などを造るに用ひる。又幹や枝は薪や炭にして用ひる。(一一頁)

第九 竹

竹の幹には多くの節があつて、節と節の間は中が空洞である。幹は地上に高く立つてゐて、上の方の節から枝が互違ひに出て、枝の先の方に葉が幾枚かづつ互違ひに着いてゐる。葉の本はさやのやうになつて枝を包んで、枝の節に着いてゐる。葉の筋は縦に通つて並んでゐる。

竹の幹には年輪がなくて、中に多くの強い筋のやうなものがある。竹の皮は物を含むに用ひる。(一四頁)

竹の幹は竿や垣や籠などを造るに用ひる。筒は食用にする。竹の皮は物を包むなどに用ひる。(一四頁)

竹の幹は竿や垣や籠などを造るに用ひる。筒は食用にする。竹の皮は物を包むなどに用ひる。(一四頁)

竹の幹は竿や垣や籠などを造るに用ひる。筒は食用にする。竹の皮は物を包むなどに用ひる。(一四頁)

竹の幹は竿や垣や籠などを造るに用ひる。筒は食用にする。竹の皮は物を包むなどに用ひる。(一四頁)

竹の幹は竿や垣や籠などを造るに用ひる。筒は食用にする。竹の皮は物を包むなどに用ひる。(一四頁)

竹の幹は竿や垣や籠などを造るに用ひる。筒は食用にする。竹の皮は物を包むなどに用ひる。(一四頁)

第十二 柿の木

柿は大木になる。冬は葉がない。春になつて暖くなるま若い枝・葉を出し、五・六月頃花を開く。葉は互違ひに着いてゐて、長い圓い形で先が尖つて、縁に切れ込みがない。花は下に向いて開く。花には雄花と雌花とあつて、ごちらにも四枚に分れた萼と四枚の花瓣がある。花の間に互にくつゝいてゐる。雌花の萼は雄花の枝よりも大きい。雄花には多くの雄蕊があつて、その袋から粉を出す。雌花には一つの雌蕊がある。

雄蕊の出した粉は虫に着いて運ばれて、雌蕊の先に着く。雌花は早く散つて落ちる。雌花は残つて、雌蕊の本は實になり、萼は實と共に残る。(一一頁)

第十五 栗の木

栗は大木になる。冬は葉がない。春になつて暖になると若い枝・葉を出し、六月頃花を開く。葉は互違ひに着いてゐて、長い圓い形で先が尖つて、縁が鋸の歯のやうになつてゐる。葉には一本の縦に通つた太い筋から多くのやや細い筋が分れて出て、縁の鋸の歯のやうな所にさびいてゐる。花は小さくて、雄花と雌花とある。雄花は六枚程に分れた萼と十本程の雄蕊とから出来てゐて、多く集つて長い穂になつてゐる。雌花は六枚程に分れた萼と一つの雌蕊とから出来てゐて、三つ程づつ集つて、多くの緑色の苞で包まれて、穂の本に着いてゐる。雌蕊の先は幾本かに分れてゐる。栗の花には香がある。雄蕊の出した粉は虫に運ばれて雌蕊の先に着く。穂は雄花が開いてから間もなく落ちる。雌花は苞に包まれたまゝ、残つて後に實が出来る。栗の木材には年輪があつて、多くの細い孔が縦に通つて居る。水はこの孔を通つてのぼる。(二五頁)

第二十九 栗の實

栗のいがは苞が大きくなつたものであつて、中に三つ程の實を包んでゐて、外面には多くの針がある。實が熟すと、いがはさけて開いて、實が落ちる。實には、堅い皮があつて、中に一つか二つ三つの種がある。種の皮は柔らかくて、濃い。種には二枚の厚い子葉がある。子葉は養分を多く含んでゐて、食用になる。子葉の間には一つの小さい棒のやうなものがある。これは後に子葉から養分を取つて根や幹になるものである。栗のみの中には白い肥えた虫のゐるものがある。これはしぎむしといふ虫の子であつて、みの内部を食つて後には皮の圓い孔をあけて出る。(五二頁)

第三十 きのこと

松茸は赤松の生えてゐる所の近くに生える。この所には土中に白い柔かい糸のやうなものがある。松茸は年々、秋になるま、これから松茸が出るのである。松茸は柄さ、傘さから出来てゐて成長すると傘が地上に出て開く。傘の下面には多くのひだがあつて、ひだの面に多くの細かい胞子が着いてゐて、傘が開くま胞子が散つて落ちる。

松茸は香も味も良く、食用にする。椎茸は松茸に似てゐるが、柄が細く、短かくて、傘が薄い。椎や櫛などの枯木に生えるのであつて、その生える枯木には皮の内側に白い柔かい糸のやうなものがはびこつてゐて、これから春と秋に椎茸が出る。

椎茸は香も味もよく、又乾かして貯へるこゝが出来て、廣く食用にする。菌には種々ある。その中で、まつだけ・しひたけ・はつだけ・しめぢ・しょうろなどは食用になる。しかし菌には毒のあるものも、すくなくない。

菌は白い柔かい糸のやうなものから出来てゐて、これに緑色や黄色や灰色などの胞子が出来る。胞子が落ちるこゝにかびが生える。かうぢは蒸した米にかうぢかびの生えたものである。

菌や蕈は根も莖も葉もなく、白い糸のやうなもので養分を取る。又花がなくて胞子が出る。(五三頁)

第三十一 柿の實

柿の實は初は緑色であつて、堅くて、澁い。秋になるとだん／＼に熟して、赤く、柔かく、甘くなる。實の本には四枚に分れた萼がある。實の内部には八つの室があつ

て、室の中に一つの種がある。實は熟すと人や鳥や獸に食はれて、種は諸所に捨てられる。種は長い圓い形で、平たい。種には赤茶色の皮の中に、淡鼠色の堅い胚乳があつて、その中に白い柔かい胚がある。胚は二枚の子葉と一本の柄のやうなものから出来てゐる。種から柿の木の生えるとき、子葉は初に出る二枚の葉になり、柄のやうなものは根や幹になる。胚乳はそのときの養分になるのである。柿の實は食用にする。又その若くて澁い實から、柿油を取つて物に塗るのに用ひる。(五六頁)

尋常小學理科書 (第六學年兒童用)

第五 種子の發芽

(上略) 松の種を蒔くとき、若い莖が地上に出て、その上端に數本の細長い緑色の子葉が着いてゐる。(下略)(一〇頁)

第二十四 熱の移り方

(上略) 金屬は熱をよく傳へるけれども、木は熱を傳へにくい。(下略)(一頁)

尋常小學地理書 (自卷一—至卷二)

●尋常小學地理書 卷一 (第五學年兒童用)

第一 日本

(上略)一般に山が多く平地が少いにかゝらず、種々の農産物が出る。森林地が多いので林産物も少くない。(中略)したがって農業・林業・鑛業・水産業がそれぞれ相當に發達してゐる。(下略)(三頁—四頁)

第二 關東地方

二 地 勢

那須嶽・男體山・赤城山・榛名山・箱根山(一〇頁)
鹽原・日光・伊香保・箱根(一一頁)

(上略)又多摩川の水は東京にひかれ、相模川の水は横濱にひかれて、市民の飲料水や用水となつてゐる(一二頁)

六 伊豆七島

三原山(三〇頁)

第三 奥羽地方

二 地 勢

磐梯山・岩手山・岩木山・鳥海山・月山(三一頁—三二頁)

(上略)松島灣がある。この灣内には松のしげつた大小あまたの島があつて、風景が甚だ美しい。(三七頁)

三 産 業

(上略)奥羽地方は氣温が一般に低いから農産物の産額が少い。しかし山林・原野が殊に多いので林業・牧畜は盛んである。(下略)(三八頁)

(挿繪—林檎の採集)

(上略)日本海方面には山林が多く、殊に米代川の流域には杉の大森林がある。こゝから出るたくさんの木材は川や鐵道によつて各地に送られる。したがつてこの川の沿岸では製材業が處々で行はれ、その中で米代川の川口に近い能代港が最も盛である。(下略)(四〇頁)

(挿繪—能代港製材所の圖)

第四 中部地方

二 地 勢

槍嶽・白馬嶽(五三頁)。御嶽・乗鞍嶽・白根山(五四頁)。
淺間山・白山(五六頁)。

(上略)富士山で、高さは凡そ三千八百メートル、四時雪

谷いたゞいて駿河灣の沿岸にそびえてゐる美しい姿は、まことに我が國第一の名山たるにはちない。(下略)(五五頁)

(挿繪—富士山と大宮附近の製紙工場の圖)

三 産業

(上略)又山地には林業の盛な處もある。(六三頁)

(上略)静岡や輪島では漆器を製し(下略)(六七頁)

(上略)富士山の裾野の大宮附近にはあまたの製紙工場があつて洋紙を製造してゐる。

中部地方で最も名高い林業地は木曾川の上流流域の木曾谷である。こゝにはひのき・さはらなどの良材が多いので、これを伐出して各地に輸送する。この木材の主な集散地は名古屋である。(下略)(六八頁—六九頁)

(挿繪—木曾の森林と森林鐵道)

第五 近畿地方

二 地勢

山上嶽・大臺原山・紀伊山脈には金剛峰寺があるので名高い高野山、史蹟と櫻とで名高い吉野山(下略)(七九頁)。

金剛山・笠置山(八〇頁)。比叡山・京都盆地(八一頁)。

(上略)宮津灣には一條の砂洲が長くつき出てゐて、松の林がその上をおほひ風景が美しい。これがいはゆる天橋

立である。(下略)(八三頁)

(上略)明石海峡の北岸は松の立ちつゞいてゐる砂濱の景色が美しい。(下略)(八五頁)

三 産業

(上略)南部は氣候が暖かくて雨が多いから樹木がよくそだつ。殊に紀川・熊野川の流域は杉の造林が盛で、あまたの良材を産し、熊野川流域のものは主として川によつて新宮に送られ、紀川流域のものは川又は鐵道によつて各地に送られる。(九二頁)

(挿繪—紀川上流々域の伐木及び筏流しの圖)

第六 中國地方

二 地勢

大山(一〇四頁)。

第七 四國地方

二 地勢

劍山・石鎚山(一一五頁)。

三 産業

太平洋方面は北の四國山脈と近海の暖流との影響で、瀬戸内海方面よりも氣候が一層暖かく、雨量がゆたかである。それ故、この方面では樹木が繁茂し林産物の産額が少くない。(下略)(一一六頁)

高知縣・愛媛縣では各地でみつまたやかうぞを原料として和紙を製造してゐる。(下略)(一一九頁)

(挿繪—伊野の製紙工場)

第八 九州地方

二 地勢

鶴見嶽・阿蘇山・温泉嶽・耶馬溪(一二五頁)。

霧島山・櫻島(一二七頁)。

阿蘇山は高さは約一千六百メートルに過ぎないが阿蘇火山脈の主峰であつて、元の火口は東西十八キロメートル、南北二十四キロメートル、諸外國にも例のない大火口である。今ではその火口が埋まつて、中央部には新しい數個の火口丘が出来てゐる。これと元の火口壁との間は平地になつてゐて農業・牧畜が行はれ、都邑がいくつも出来てゐる。(一二六頁)

三 産業

(上略)筑紫平野では はぜの實(一三一頁)。

(上略)中部・南部の山地では木材が多く伐出され、處々で木炭が製造される。(下略)(一三一頁)

(挿繪—はぜの木の木の林の圖)

尋常小學地理書 卷二 (第六學年兒童用)

第一 北海道地方

二 地勢

旭岳・大雪山火山群・駒岳・羊蹄山(二頁—三頁)

三 産業

(上略)本島には森林が甚だ多く、えぞまつ・とよまつ・なら等は用材として小樽・釧路等の港から各地に送られる。苫小牧・江別には大きな製紙工場があつて、木材を原料として盛に洋紙を製してゐる。(下略)(一一頁)

(挿繪—森林を伐採して開墾する實況)

第二 樺太地方

三 住民・産業

(上略)しかし森林は甚だ多くて、とよまつ・えぞまつ・からまつなどがたくさん伐出される。随つてパルプ製造業及び製紙業が各地で極めて盛である。パルプ製造業及び製紙業はこの地方第一の産業である。(下略)(一九頁)

(上略)知取は製紙業によつて發達した處である。(下略)(二二頁)

(挿繪—からまつ林の圖)

第三 臺灣地方

二 地 勢

(上略)殊に新高山は高さが三千九百五十メートル、我が國第一の高山である。(二五頁)

(挿繪)阿里山の檜林の圖

三 産 業

(上略)かやうに氣温が高い上に雨量も多いから、樹木が繁茂し、大きなひのき・くすのき、熱帯植物のがじまる・びんらうじなどが森林をなしてゐる。又バナナ・パイナップルをはじめ種々な熱帯の果物が多い。(下略)(二八頁)

(上略)臺灣山脈にはひのきの良材が多く、中には年輪が凡そ三千、直径が七メートルもあるものもある。阿里山では盛にこの良材を伐出し、鐵道を利用して各地に輸送する。随つて製材業も處々に起り、殊に嘉義には東洋屈指の大製材所があつて、製材高が甚だ多い。

中部・北部の山地では、くすのきから樟腦及び樟腦油を製し、基隆から内外各地に送り出す。樟腦は本島の特産物で、外國にも有名である。(下略)(三一頁)

第四 朝鮮地方

二 地 勢

朝鮮の新義州には大きな製材所がある。

木材は産額が少くないにもか、はらず、需要が年々増加するので不足を告げ、アメリカ合衆國・シベリヤ・カナダから輸入したものでこれを充たしてゐる。

木材を原料とするバルブの製造業及び製紙業は近年大いに發達し、北海道本島・樺太等で生産する高が次第に増加して、今や需要の大部分を充たしてゐる。(七〇―七一頁)

(上略)輸入品の最も主なものには綿でこれに次ぐものは鐵及び鐵材・木材・羊毛・機械・豆粕である。(下略)(七八頁)

第八 アジヤ洲

二 支 那

(上略)滿洲の東部から南東部にかけては處々に大森林がある。鴨綠江流域の森林では日支兩國人協同の會社が木材を伐出し、鴨綠江を下してゐる。その大集散地は新義州の對岸にある安東で、こゝでは製材業も盛である。又松花江沿岸の吉林も木材の主な集散地として知られてゐる。(下略)(一〇四頁)

(上略)長春は又大豆・木材の一大集散地である。(下略)(一〇七頁)

三 シベリヤ

(上略)シベリヤ(中略)中部は一帶の森林地で、いづれも

白頭山・金剛山(三八頁)。

三 産 業

朝鮮地方は雨量が少ない上に古來樹木の保護が行届かなかつたから、山地の大部分には良材が乏しい。(下略)(四二頁)

(上略)鴨綠江・豆滿江の流域には大森林があつて、てうせんまつ・からまつ・もみ等の良材が伐出される。殊に鴨綠江の流域は木材の産額が多く、この川を下る木材の主な集散地は新義州である。新義州には大きな製材所がある。(四五頁)

(挿繪)新義州の製材所の圖

第六 我が南洋委任統治地

コブラ(五八頁)。

第七 日本の總説

淺間山・阿蘇山(六二頁)。

森林はその面積が我が國の總面積の約二分の一に當つてゐて、各地で木材が伐出されてゐる。木材の主なものには、木曾谷・阿里山のひのき、米代川・吉野川各流域の杉、鴨綠江流域のてうせんまつ・からまつ・もみ、北海道本島・樺太のとよまつ・えぞまつである。

製材の業も處々に發達し、秋田縣の能代灣、臺灣の嘉義

まだ開けない。(下略)(一一頁)

五 東南アジヤ・印度支那半島

(上略)マレー半島はゴムの木の栽培が盛で、こゝに在留してゐる我が國人も多くこれに従事してゐる。(下略)(一一七頁)

(上略)マレー諸島ではさとうきび・ゴム・マニラ麻・やし等の栽培が盛に行はれてゐる。(下略)(一一八頁)

アメリカ合衆國領のフィリッピン群島からはマニラ麻やコブラが多く輸出される。(一一九頁)

(挿繪)ゴムの採集・コ、やし・マニラ麻の乾燥の圖

第九 ヨーロッパ洲

(上略)又地中海方面ではぶだう・オリーブ・レモンなどの栽培が盛である。(一二四頁)

(挿繪)オリーブの收穫

中部から北の諸國には森林が多く、殊にロシア・スエーデン・フィンランド・ドイツ等には廣い森林があつて木材の産額が多い。又スエーデン・ノルウェーでは木材から盛にバルブを製造する。このバルブは我國へも輸入される。(一二六頁)

スイスはアルプ山中にある小さい國であるが、水力を利用した各種の工業が發達してゐる。又山水の風景が美し

いので、遊覽地として世界に知られ、登山の設備等も行届いてゐる。それ故諸外國から來遊するものが極めて多い。(一四〇頁)

第十 アフリカ洲

(上略)本洲の大部分は熱帯にあつて暑さがはげしい。その中、中部の地方は雨量が多いので、到る處に大森林があるけれども、交通が不便だからあまり利用されてゐない。南部及び北部の内地は雨が少いので、廣い草原や沙漠があるばかりで、交通も産業も共に發達してゐない。(下略)(一四三頁)

第十一 北アメリカ洲

カナダの東西兩部と合衆國の西部には大森林があつて木材の産出が多く、パルプの製造も盛である。木材やパルプは我が國へも多く輸入される。(中略)(一五二頁) 中央アメリカや西印度諸島ではさとうきび・バナナ・煙草・コーヒー等の栽培が盛である。(下略)(一五二頁) (上略)殊に合衆國との貿易が最も盛で、我が國は綿・木材・鐵及び鐵材・機械・自動車・石油・小麦等を彼から輸入し。(下略)(一六一頁) (挿繪—合衆國の太平洋沿岸から輸出する木材の筏。)

第十二 南アメリカ洲

(上略)アマゾン川流域の平地にある大森林の如きも、土地が低く氣候が悪いから、あまり利用されてゐない。たゞゴムの木からゴムが採集される位のこゝである。(下略)(一六四頁)

(挿繪—アマゾン河沿岸の密林)

(ト略)ブラジルのコーヒーは殊に名高く、世界の總産額の大部分を産出し、主としてサントス港から各國に輸出される。(下略)(一六五頁) (挿繪—コーヒーの結實・コーヒーの收穫及積出の圖)

高等小學讀本

(自卷一——至卷四)

●高等小學讀本 卷一 (高等小學第一學年兒童用)

第二課 太田道灌

道灌は初め左衛門太夫持資さいひ(中略)、雨具を借らんとするに、少女出て來りて、一言の答もなく山吹の花一枝を差出す。持資其の意を解せずして歸りしが、後或人の語りて、それは「七重八重花は咲けどもやまぶきの、みの一つだに無きぞ悲しき」といふ古歌の心なるべしといふを聞きて(下略)(四—五頁)

「我がいはは、松原つゞき海近く、富士の高根を軒端にぞ見る」(下略)(六—七頁)

第六課 野火止の用水

雑木・楓・杉・檜(一八一—一九頁)

第九課 山村

(上略)山の木は松・杉・檜のときは木、其他は栗・樺・楓などで、櫻はあまり無いが、それでも木の間がくれに咲く一本二本のゆかしい眺はある。春も半ばを過ぎる頃から、山村は生氣に満ちて來る。楓や樺の若葉が山々にもえ。

(下略)(三二—三三頁)
紅葉(三七頁)

第十一課 笑話

珠數

向ふより來る者、數珠をくびに掛け、大きな笠を着たり。(下略)(四—頁)

第十四課 西洋紙の製造

西洋紙を製造するには、藁・ぼろ・紙くづ等も原料として用ひられるが、主として使用されるのは木材である。現今我國では、えぞ松・とど松等の松材を用ひてゐる。木材を材料として紙を造るには、先づ木材を機械にかけて、長さ一二寸ぐらひの薄片にする。之を圓筒形の大きな釜に入れて、薬液を混じ、釜の中に蒸氣を通じて熱する。木材の組織が破壊されて、纖維が分離する。そこで他の不要な部分を捨て、纖維だけを取り出して他の機械にかけ洗つたり、さらしたりすると、白色のごろごろした糊のやうなものとなる。此紙料を抄紙機にかければ、紙が出

にも、のぼつて来る。これが夜さなく晝さなく働いて抄出す紙の量は、實に莫大なものである。(全文)(五五―五九頁)

(挿繪―抄紙機の圖)

第十八課 象 狩

立木・櫛・竿・槍(七〇頁)。

第十九課 南洋の珍果

(上略)早速マンゴスチンの征伐にかゝつた。大きさは密柑ぐらゐ。黒みがちの紫色をした厚い殻を、ナイフで切廻して、すぼつと二つに開くと、純白な美しい肉が現れる。之をフォークの先でそつと引上げると、密柑のふさのやうに抱合つた六個の白肉が、其のままそつくり出て来る。之を舌に載せると、あたかも春の淡雪のやうにすぐ解け去つて、唯芳香のみが残るやうに感じられる。味は林檎に似てしかも非常に甘く、舌ざりはさながらアイスクリームのやうである。

思ふにマンゴスチンは、造化が其巧を凝らして、萬果の粹を此一果に集めたものであらう。しかし此實は、枝を離れて一週間たゝぬ間に、早くも白色が褐色に變じて、くづれてしまふ。かつて英國の汽船會社が、船長等に賞を懸けて、一籠のマンゴスチンをピクトリヤ女帝

來るのである。此外に木材を大きな砥石にかけて磨りつぶし、之に水を混じて其ま、抄紙機にかける方法もあるが、是はまさして新聞の紙など粗悪なものを製造する方法である。抄紙機は幅八九尺、長さ十數間にわたる大きな機械で、抄網部・壓搾部・乾燥部・光澤部の四部から成つてゐる。其中で抄網部は紙を抄く仕事をすする所で、普通に紙を抄く時に用ひる竹の簀の代りに、眞鍮の細かい網が帯のやうに張られてゐる。此金網は少しづつゆれながら、絶えず一方から一方へと動いて行く。紙料が此の金網の上を流れ出るさ、水は網目から落ちて大體紙が出来金網の進行に伴なつて壓搾部に送られる。壓搾部はまだべさべさした抄きたての紙を毛布の上に受けて運びながら、ロールで壓搾し、更に水分を除去する所である。次の乾燥部には、蒸氣で熱せられた幾多の圓筒が横に並んでゐて、紙が其圓筒の面に沿うて順次に進みゆく間に乾かされる。光澤部はロールの壓搾によつて、之に光澤を附ける所である。斯うして金網の上を流れ出る糊のやうな紙料が、見る見る中に完全な紙となり、巻取機に巻かれてゆくその早さは、實に目を驚かさばかりで、一分間に抄出される紙の長さは、實に三百尺から七百尺に及ぶのである。現時我が國にある此の種の抄紙機は百臺の上

の食膳に奉らうとしたが、遂に誰一人成巧しなかつたといふ。近頃冷蔵庫に入れて遠地に送るが、やはり香味を失つてしまふ。罐詰にしては、到底香味の萬分の一をも保たないといふことである。

晝食後部屋に歸つて、しばらく休んでゐると、何とも言はれぬ悪臭が鼻をついて来る。何だらうと考へて見てもわからない。するさ廊下の方で、かちりさナイフの音がする。戸をあけて見ると、ジョンがドリヤンの實を割つてゐる。少し離れて、土人のボーイが、ほしさうな顔をして立つてゐる。マンゴスチンを果物の女王とすればドリヤンは果物の悪魔である。腐つた卵のやうな悪臭、さげのあるにくくしい外皮、それでゐて其の特殊な味は、食ひなれた人を非常に誘惑する。大きさは子供の頭ぐらゐ、暗黄色を帯びた外皮は木の皮のやうに堅く、之に太いさげが密生してゐる。高さ數十尺の樹上に生じ、往々通行人に落ちかゝつて大げなをさせることがある。しかも木からもぎ取つては未熟であり、落ちてゐるのを拾つては腐敗のおそれがあるから、土人は終日終夜、樹下に居て、實の落ちて来るのを待つてゐるといふ話である。

今ジョンが割つたドリヤンの實を見ると、其の中に不規

則な幾つものかたまりがあつて、其の一つが、ごろごろとして黄色いクリームのやうである。其の濃厚な味は、マンゴスチンの淡泊上品さ全く正反對であるが、食ひなれると、其の悪臭などは少しも氣にならぬのみかかへつてマンゴスチン以上に好むやうになるといふ。ドリヤンの出盛頃になると、土人は之をむさぼり食はんがため、往々家業を捨てて顧みないといふことである。

(鶴見祐輔著「南洋遊記」(七五頁―八〇頁))

(挿繪―マンゴスチン・ドリヤンの果實)

第二十二課 漁船歸る

帆柱・櫛(八九―九〇頁)。

第二十三課 かぶと蟲

標本箱・朽木(九三頁)。

(上略)此の木は幹には處々蟲の食入つた穴があつて、穴の口には細かい木くづが蟲の糞と共にこぼれかゝつて、一種の臭氣を放つてゐた。見るさ幹の高い處に、見事なかぶと蟲が、いかめしい角を立ててしまつてゐる。(下略)(九四頁)

第二十六課 筏流し

紀伊山脈の間を縫つて流れ下る十津川と北山川の沿岸は有名な木材産地である。随つて此の二川の合した熊野川

の川口にある新宮の町には、リつばな製材所もあれば、木材を運ぶ船もたくさんに着いてゐる。製材所の貯木場や川口の附近に行つて見ると、何萬も数知れない木材が、果もなくぎつしり水面に浮かんでをり、川上からは大きな筏が後から下つて来る。其の有様は實に壯觀である。

斯うたくさん木材が集つてゐるさうだけを見ると、わけもなく此處まで運ばれたもののやうに思はれるが、何しろ二十里三十里の山奥で伐つて運んで来るのであるから、決して容易な業ではない。

先づ某の山で、幾百本の立木を伐倒す。さうして木の大きさや種類によつては、其のまゝ直に出すものもあるが、多くは五六箇月から一年ぐらひも乾かして後、山出しにかゝる。伐出した場所が谷に近い處なら、其まゝ押落すが、谷へ遠い處では、木材を數本縦に並べて、其上を順次にすべらせて送り出す。

やつと谷へ木材を落しても、多くは木を流す程の水の無いのが常であるから、今度は此谷をせき止めて、氣長に水をためる。其中に、水が次第に増して、堰を溢れるやうになるさ、木材を一本一本流し落す。勿論行く手にも水が乏しければ、幾度でも之を繰返す。若し又全く谷に

水が無いさなるさ、別の方法をさらねばならぬ。それにはたくさん細い木を二尺おきぐらゐに横に並べて、其の上をそのやうなものに載せて運ぶのである。

さてや、大きな川へ出たさなるさ、管流しといつて、木材を一本一本のまゝで川へ流す。之が流に随つて幾里か、流れ下つて「あば」に着く。「あば」といふのは、川を横切つて鐵線を張渡して置き、上流から流れ下る木材を受止める處で、此處で始めて筏に組む。

筏の組みやうは、先づ尺締(方一尺、長さ二間の體積)四本を標準として一組とし、此の一組の木材を幾つもつないだものが一筏になる。いはば一筏は一列車、各組の木材は一輛々の車に當るのである。筏には大小あるが、先づ八組又は十一組づつ、つなぐのが普通である。一筏には通常二人乗つてゐる。一人は前の方で舵をこりながら權を使い、一人は後に居て竿を執つて筏を操る。若し水が少い時であるさ、川の途中に開門のついた堰を作つてあるから、此の門を閉じて水をたへた後、さつと門を開くと、筏は瀧のやうに流れ落ちる水につれて、矢よりの早く下つて行く。斯うしてだん／＼本流に出るに隨つて、水量は次第に多くなり、流は漸く緩くなる。筏師が此の間の變化極りない景色を縫つて下る様は、如何に

(四六頁)

(森林火災保険につきて解説)

第十四課 植物と氣象

春は霞がたなびいて、薄曇の日が多い。此の空合に雲がさまがふ櫻の花の咲き亂れてゐるのは、よく調和の美を現してゐる。若しも此の花が澄渡つた秋の空に開いたとすれば、優美麗麗な櫻の特性は十が一も現れまいと思ふ。(下略)(六一頁)

(上略)盛夏の候さなれば、快晴の日でも、空氣は水分を含んで、何さなく夕立の雲でも起りさうに思はれるが、其の青空に縁滴る木々の枝をさし交してゐるのは、また配合の妙を極めてゐる。やがて秋になれば、空氣が清らかになつて、空があくまで澄んだ中に、かへつともみぢしたのや、いてふの黄ばんだ葉が照らし出されるのは實に言ひ難い趣がある。冬の寒空に、梅・臘梅などが春に先だつて咲いたのもまた似つかはしい。(下略)(六二頁)

(上略)雨の多い處に生育する植物、又はさういふ地方から移し植ゑられた植物には、自ら雷雨などのほげしい雨にふさはしいものが多い。彼の青桐は其の一例である。直立して膚の青い幹が、雨に洗はれて一入鮮緑の色を増し、きれ込んだ廣い葉が、はら／＼と音を立てて、葉末

も愉快さうに見えるが、雨露にさらされ、水にひたり、日が一昨日水を見つめて、ちよつとの油断も出来ない身になつては、容易な苦勞ではない。有名な瀨八丁も、九里峽も全く其の眼中には入らないのである。(全文)(一一〇頁—一一五頁)

(挿繪—筏流しの實景・鐵砲堰の圖)

第二十九課 足柄山

筈(一二五頁)。

●高等小學讀本 卷二 (高等小學第一學年兒童用)

第四課 鎮守に詣でて

大木(一一頁)

第七課 猫の垣巡

主人の庭は三方竹垣を以てしきられてゐる。(中略)殊に處々に根を焼いた丸太が立つてゐる。(下略)(二四頁)

第九課 鱒釣

筈(三七頁)

第十課 保險

(上略)火災保險は、家屋や物品等が火災のために焼けた場合に、其の損害を填補するための保險である。(下略)

●高等小學讀本 卷三 (高等小學第二學年兒童用)

第一課 春晴千里

筏(六頁)。

第三課 文字

櫻(一二頁)。

第十五課 租 稅

所得稅(山林所得稅の解説)、府縣稅の附加稅、市町村稅(林業關係地方稅の解説)(七六頁)

第十六課 水と風景

江山の勝さいひ、林泉の美さいひ、風光の佳麗なる處、水色の添はさるはなし。
四面海をめぐらせる我が國には、到る處、長汀曲浦の眺、乏しからず。彼の日本三景を始とし、舞子の濱・和歌の浦・三保の松原等は何れも海濱の勝地として名高く、特に瀬戸内海の風光は世界に冠たりと稱せらる。
琵琶の湖水を外にしては近江八景なく、中禪寺湖・蘆湖を除きては日光・箱根の勝もいふに足らざるべし。中禪寺湖の水は懸つて華嚴の瀧となり、はしつて大谷川となり、緑樹紅葉の間に隠見する所、日光山、林谷の美あり。蘆湖より落つる早川の溪流は、玉さ碎け雪を噴き、行く

から餘滴を垂らすなど、如何にもよく其の趣を現はしてゐる。(下略)(六三頁)

縦・杉・松などの緑色の葉が眞白に積つた雪の中から現はれ出たのや、南天の赤い實が、雪の中に際立つて見えるなどは、色彩の配合上、見捨て難い美觀である。節くれ立つた松、しなやかな竹が積雪の重みに堪へてゐるのは一は剛健、一は清楚の趣を現はしてゐる。(六四頁)(三好學者「植物生熊美觀」)

第十六課 年頭の十日

(上略)門松に添へた竹の葉が、かさ／＼と鳴ると思つてゐたら、雨が降り出した。(下略)

(上略)縁先の南天が雪でたわんで、赤い實が殊に美はしい。(下略)(六九頁)

第二十三課 海 苔

一 海苔採

(上略)築は一柵の長さ二十間から三十間もあつて、それが幾柵も列をなして並んでゐる。(下略)(九八頁)

(挿繪—海苔採りの實況)

二 海苔すき

桶・蓋・櫃(一〇二頁)

(挿繪—海苔すきの圖)

行く浴樓の下を廻りて遊人の耳目を洗ふ。
耶馬溪は奇石怪岩を以て聞ゆれども、山國川の此の間を流れて、淵となり、瀧となり、瀧となりて奇觀を添ふるにあらずんば、いかでか鎮西の絶景たる名稱を専らにするを得んや。木曾山中の偉觀は、老樹の鬱々として畫向暗きにあれども、木曾川の流るゝありて、其の景に光と色とを與ふるなり。月の瀧の梅も水によりて趣を増し、高雄の紅葉も流に映じて錦を漂はす。

れんげさう・たんぼ、の咲満ちたる春の野を流るゝ一條の水、竹籬の外より入りて石に隨ひて曲折する庭園の細き流、其の景趣を添ふるこそ幾何ぞ。朝日も、夕日も、月も、星も、水に映じて美しく、ほたるも水邊に亂れ飛ぶによりて風情殊に多し。

水の豪壯は天をうつ怒濤に見るべく、地を震はす飛瀑に見るべく、岩石を提げてはしる急流に見るべし。平和は洋々たる春の海に在り、岸遠く遙かにして、白帆風をはらんで下るの長江に在り。静寂は水面鏡の如くにして蘆荻岸に疎に、山禽時に來つて翼を洗ふの沼澤に在り。(全文)(七九頁—八一頁)

第十七課 天然記念物

我々の住んでゐる此の地球上には、數限も知れない天然

物が存在する。それ等の中には、學問上から見ても、風致上から見ても、非常に貴重なものがある。世の中が開けるに隨つて、其の或物は次第々々に毀損されて行く。今毀損の原因の主なるものを擧げてみる。其の物の價値がわからないために、知らず／＼の間に破壊されることもあり、或は不慮の災害によつて損はれることもあるが、多くは文明の進歩と共に、天然物其のもの、又はその存在してゐる土地を利用することが益々多くなるため、又工業の進歩發達につれて、煤煙や有毒瓦斯等の發生が多くなるためである。そこで世界各國では、それ等動物・植物・地質・礦物等の中で、絶滅に瀕したものを、又は其の代表的標本ともなるべきものを、即ち自然界を記念すべきものを總べて天然記念物と稱して、其の保存に大いに力を注いでゐる。

我が日本國は、氣候が比較的溫和で、雨量が多く、國土が寒帯から熱帯に及んでゐる等の關係上、動物・植物の種類が非常に多く、隨つて天然記念物に富んでゐる。これは我が國の誇とするところであるが、今にして保存に力めなければ、終には此の誇を失つてしまふおそれがある。政府もここに着目して、大正八年これが保存法令を發布し、其の指定により、着々保存の方法を講じてゐる。

しかしかやうな事は、單に法令の力によつてのみ成し遂げられるものではなく、國民各自がよく其の尊ぶべき所以を解して、共に力を盡くさなければならぬ。

今我が國に於ける天然記念物の例として二三のものを挙げてみる。(中略)

植物に關するものでは、社叢(神社の森)・名木・巨樹・原始林・珍奇植物・高山植物等がある。奈良春日神社のなぎの純林は社叢の代表的なもの、奈良の八重櫻・高砂の松・尾上の松・曾根の松は、或は珍種として、或は樹形のりつばな點から、名木として保存されてゐる。又鹿児島縣蒲生の樟は、目通りの周圍圍七丈五尺に及ぶ日本第一の巨樹である。珍奇植物の一例としては、岐阜・長野・愛知三縣の縣境附近に産する花の木があり、原始林としては北海道の野幌、奈良縣の春日山、鹿児島縣の屋久島等が有名である。其の外、白馬連山にある高山植物帯も、一指定地としてみだりに其の中の植物を採取することを許されない。(中略)

今や世界の國々は、それ／＼天然記念物の保存に力を注いでゐる。早くより此の美德を有した我々日本人が、之に對する用意をゆるかせにして、天與の寶を空しく毀損してはならぬ。(八一頁―八八頁)

(挿繪―花の木の圖)

第二十課 中古の誠實

沐机(九六頁)

第二十一課 夕立雲

(前略)杉や櫻の木立、孟宗竹の藪などが、濃い緑を浮かしてゐる。(後略)(一〇二頁)

第二十三課 返子だより

松林帯(一一四頁)

第二十四課 地震

木造家屋(一二三頁)

第二十五課 日本の風土

試みに大日本全國に向つて、帝國領土の廣がりを見よ。樺太・千島・北海道・本州・四國・九州・琉球・臺灣の島々は、東北より斜に長く西南に連なり、最南の臺灣の一部は既に熱帯の内にはいつてゐる。又朝鮮は滿洲及びシベリヤに接して、アジア大陸の一部分である。されば地方によつて氣候に甚だしい差異があり、生物の種類も頗る多い。

(下略)(一二四頁)

(上略)植物も亦豊富で春は櫻、秋は花よりも美しい紅葉が、松・杉・檜などの常盤木の間を點綴してゐる景色は獨り我が國に於てのみ見られるのである。(下略)(一二五頁)

富士山・磐梯山・赤城山・榛名山・淺間山・立山・白山(一二七頁)

第二十九課 待賢門の戰

(上略)大庭のむくの木を中に立て、左近の櫻・右近の橋のあたりを七八度追廻して、(下略)(一四〇頁)

弓(一四二頁)

●高等小學讀本 卷四(高等小學第二學年兒童用)

第四課 養 蟲

(上略)養蟲は蛾の幼蟲で、我國に凡そ七種居る。(下略)(一一頁)

第五課 渡り鳥

雜木林・櫟・榆の木(一五頁)

第十一課 ハワイ通信

(上略)海岸に立ち並ぶ椰子の並木(下略)(四八頁)

常盤木(四九頁)

第十五課 詠史十首

青砥藤綱

滑川水底照らす松の火に 深き心の見えもするかな(七四頁)

第二十課 我が家

(上略)屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、いちじゆくや、さるすべりや其の間に簇生す。(下略)(八八頁)

(上略)もこは朽木中に満ちて(下略)(九〇頁)

第二十六課 大 樹

森の好きな私は、此の夏輕井澤の落葉松の森の中に小さい家を建てて、得意になつてゐた。(中略)其の挿繪さいふのは、「銀の樞」と題して、グレーが自分の家の大樹の下に立つてゐる寫眞である。(中略)私はイギリスに遊ぶ毎に、一木能く森をなすやうな大きい櫻の木を、汽車の窓から眺めて感歎する。あゝ、いふ櫻の古木を眺めながらイギリス人は生ひ立つてゐるのだ。私は又オランダのヘーグ郊外にある大森林の菩提樹さぶなの雄姿を忘れることは出来ない。イギリスに先立つて議院制度を世界に示したオランダ、あのヨローロッパの一角で、孤島に據つて

二千年の齡を重ねてゐるといふ學者の推定である。そこに日本國民の運命の暗示を見たやうに、私は嬉しかった。さうして私は五十鈴川のほとりに立ち並ぶ莊嚴な杉の林を思ひ浮べた。それはいろ／＼の意味で日本國民の象徴である。

第二十七課 關稅

(木材關稅につきて解説)(一二三頁)

新教と民権を擁護したオランダだけに、やはり大樹を保存し、讚美することを忘れない。パリ郊外のフォンテーヌブローの森も壯大だ。アメリカ合衆國ではニュージーランドの榲の木、蒼空に迫る老樹を打仰ぎながら、私はよく初代殖民人の心意氣を想望した。北京の町では雄大な槐の木が遊子の魂をさらへる。蘇東坡が三槐堂の文中に、王祐が大樹を庭に植ゑて、子孫に偉人の出ることを待った心持を歌つて、「王城の東、晉公のいほりせるところ、鬱々たる三槐、これ徳の符。あゝ、よいかな。」といったのも同じ心であらう。老樹を崇むる心は、人の世の悠久を思慕する心である。限なく天に向つて伸びゆく巨木の姿には、紛々たる眼前の得喪を忘れしむる威容がある。斯かる大樹を多く保存する國民のみが、千波萬波起伏重疊する治亂興亡の外に立つて、久遠の生命を保存するのであらう。社會問題といひ、時代思想といひ、經濟政策といひ、それ等一切の現實問題の根柢には、大地にごつかま根を下し、大空にすつくま伸上る大樹の力が無くてはならない。

斯く大樹を讚美する情操を抱いた私は、つい先頃土佐國に遊んで、長岡郡大杉村の山腹に生えてゐる日本一の巨杉を見た。樹幹二百尺、亭々として雲に入る此の大杉は

高等小學理科書 (自卷一——至卷二)

●高等小學理科書卷一 (高等小學第一學年兒童用)

- 第六 根の働(二七頁)
- 第七 葉の働(二八頁)
- 第八 植物の呼吸(二九頁)
- 第九 莖と根との成長する方向(三〇頁)
- 第十 細胞(三二頁)

●高等小學理科書 卷二 (高等小學第二學年用)

第一 炭水化物

綿・麻などの纖維はセルロースといふ物から出来てゐる。セルロースは植物體中に存在して、植物の細胞の膜は主にこれから出来てゐる。セルロースの纖維は白色で強靱である。糸に紡いで織物の原料にしたり、紙にすいたりする。

紙を濃硫酸に浸すと、紙は硫酸紙といふ半透明のものに變ずる。この紙は水によく耐へて、強靱である。食物を包み、又は薬瓶を被ふなどに用ひる。(後略)(一頁)

セルロイドは硝化綿と樟腦とを混じて製するものである。緻密であつて、弾性に富んでゐる。櫛や玩具など種々の小器物を造るのに用ひる。セルロイドは甚だ燃えやすいから、これで造つたものを火に近附けないやうに注意せねばならぬ。

コロチオンは硝化綿をエーテルとアルコールとの混合物に溶かしたものである。コロチオンを小さい孔から水中に押し出すと細い糸になる。この糸は絹のやうな光澤があつて、織物の原料にする(中略)。このやうにして造つた絹のやうな光澤のある糸を總べて人造絹糸といふ(後略)(二頁)

砂糖は甘蔗さとうきびの莖、菜甜さいたいこんの根などの中に多量に存在する。これから得た汁を煎詰ると、茶色の砂糖になる。これを湯に溶かして、獸骨などの炭を用ひて色を除くと、無色の汁になる。この汁を低い温度で熱して濃くしてから冷すと、砂糖の結晶が出来る。(下略)(四頁)

第三 脂肪

脂肪は動植物の體中に含まれてゐて、これから取る。(下

略(七頁)

(上略)木蠟ははぜ・うるしの果實から取つて、蠟燭の原料にする。椰子油はこやしの胚乳から取つて、石鹼の原料にする。種油・胡麻油・落花生油は主に食用にする。大豆油は石鹼の原料にする。オリーブ油は食用にし、又石鹼の原料にする。亞麻から取つた亞麻仁油やあぶらぎりから取つた桐油やえごまから取つた荏油などは乾性油といつて、空氣に觸れると酸素と化合して固まる。乾性油は塗料に多く用ひる。ペンキは亞麻仁油は種々の繪具を混ぜて造る。活版インキは亞麻仁油に油煙を混ぜて造る。(後略)(八頁)

第五 腐敗・防腐(一一頁)

(木材防腐につき解説)

第九 飲料水(二二頁)

(水道と水源林につき解説)

第十 肥料

第二十一 呼吸と空氣(六四頁)

(森林と空氣中に含まれる酸素との關係並に森林公園等の解説)

高等小學地理書

(自卷一——至卷二)

●高等小學地理書 卷一

第一 亞細亞洲

一 總論

ヒマラヤ山脈(エベレスト山)・崑崙山脈・天山山脈・アルタイ山脈・ヒンズークシ山脈 (二—三頁)

パミール高原・西藏高原・蒙古高原・イラン高原・印度高原・亞刺比亞高原(二—四頁)

(前略)生物は大いに氣候の影響を受けて、所により其の趣を異にす。南部より東南にかけては植物の成長盛にして、椰子樹・がじまる・チーク等の熱帯樹木に富み又米・茶等の農産物の額多し。此の地方の動物には象・狸々・鰐孔雀等あり。中部の草地にては馬・駱駝・羊等の牧養行はる。これより北方に至るに隨ひ、生物次第に種類を減じ極北部には僅に矮小なる樹木及び苔の類生じ、馴鹿・白熊等すめるに過ぎず。(後略)(五頁)

(挿繪—暹羅に於ける象の木材運搬の圖)(五頁)

二 支那

(前略)作蠶業は南に盛なり。又東部には廣大なる森林ありて、鴨綠江上流地方のものは、日支人協同して盛に之を採伐し、江を下して多くは安東に送る。隨つて安東にては木材の取引、製材の業甚だ盛なり。(後略)(二—三頁)

(挿繪—安東縣鴨綠江岸に於ける着材の狀況)(二〇頁)

三 西比利亞

(前略)西比利亞の北部は殆ど年中地面凍結して、産業未だ興らざれども、中部以南には、森林・沃野ありて、農業・牧畜・林業等行はる。(後略)(二—五頁)

七 印度

マツチ(三—三頁)。

八 印度支那

(上略)又此の地方の山地より平野にかけては、チーク其の他の良材を産すること多し。(後略)

ビルマ北部の山地は雨量極めて多くして、樹木繁茂し、南部の平野は米産に富む。(下略)(三—七頁)

暹羅(中略)米・木材等を輸出すること多し。(三八頁)
海峽殖民地は馬來半島の南部にありて、英吉利に屬し、
ゴム・コブラ・錫等を産す。(中略)海峽殖民地及び馬來聯
邦には我が國人のゴム栽培に従事せるもの少からず。(三
九頁)

九 馬來諸島

其の氣候・地味よく植物の發育に適するが故に、森林多
く、又農産物豊にして、甘蔗・米・茶・コブラ・マニラ麻・
煙草・ゴム・珈琲・香料・藤等の産額多し。(下略)(四二頁)
(上略)ジャワ島は蘭領印度中最も開けたる所にして、農
産物多く、其の北岸にある首府バタビヤよりは、砂糖・珈
琲などを輸出すること甚だ多し。(中略)セレベス島はコ
ブラを産し。(下略)(四二頁)
フィリピン群島中、ルソン島は殊によく開け、西海岸
にある首府マニラよりはマニラ麻・コブラ・砂糖・煙草を
輸出す。(下略)(四二頁)
(挿繪)馬來諸島に諸ける藤細工の圖

第二 大洋洲

一 濠太刺利

(上略)動植物にはカンガルー・鴨嘴獸・ユーカリ樹など
珍しき固有のものあれども、(下略)(四四頁)

二 本洲の諸島

我が南洋委任統治地は(中略)各地にコブラを産し(下略)
(四九頁)

第三 歐羅巴洲

一 總論

ピレネー山脈・アルプ山脈(五一頁)・カルパチヤ山脈・ア
ペニン山脈・ウラル山脈(五二頁)
モンブランは高さ凡そ一萬六千尺、本洲第一の高山なり
(下略)(五二頁)
(挿繪)アルプ山脈中の一高峯マッターホーン(五〇頁)
二 東部歐羅巴
(ソヴェイト聯邦・フィンランド・ポーランド)
(上略)北極海に沿へる北部の地方には凍原ありて、地の
利少けれど、其の南には森林連りて林産物を産し。(下
略)(五七頁)

三 瑞典・諾威・丁抹

スカンデナヴィヤ山脈(六〇頁)
(上略)此の國(諾威)は農産物に乏しけれども、木材を産
すること少なからず。(下略)
瑞典は諾威に比べて地勢緩かにして、交通の便開け、内
地には木材を産し、海岸の平野には農業に適する所あ

り。(下略)(六一頁)

四 獨逸

(前略)獨逸には産業發達して、諸種の産物を出す(中略)
ライン河畔は國內にて、最も温暖なる所にして、特に葡
萄の産出に富む。林業は一般に大いに進歩し、林産物は
殊に南部の地方に多し。(六四頁)

五 奧地利・洪牙利・チエッコスロバキヤ

(上略)奧地利の(中略)國內には森林多くして、木材を産
し、草地には牧牛行はる。(下略)(六七頁)
チエッコスロバキヤの東部は山地多くして(中略)林業も
亦發達して、多く木材を出す。(下略)(六八頁)

六 瑞 西

瑞西は佛・獨・奧・伊の間にある小國にして、ライン・ロー
ヌ等の諸川、源を此の國に發す。國內にはアルプ山脈連
亘して、數多の高峯四時氷雪を載きて聳え、谿谷には瀑
布懸り、湖水湛へて風景美はしく、實に歐洲の樂園と稱
せらる。(下略)(六九頁)

七 佛蘭西

此の國の東部は山地多く、殊に其の南部にはアルプ山脈
蟠まりて、中に高峰モンブランの聳ゆるあり。西部は概
ね平地にして(中略)農業盛にして麥類・葡萄等を産する

こと多く、葡萄の産地にては葡萄酒醸造業發達し。
(下略)(七一頁)

八 白耳義・和蘭

九 英吉利

英吉利は山地多けれど、大ブリテンの東南部には廣き
平野ありて、テムス河其の中を流る。(下略)(七七頁)

十 西班牙・葡萄牙

西班牙はイベリヤ半島の大部分を占め、葡萄牙は此の半
島の大西洋に面せる一地方を占む。此の半島内には數多
の山脈ありて、一大高原をなし、(中略)沿海の地には、
葡萄・オリーブ等よく生育す。(中略)又高原のコルク・羊
等も此の地方の主なる産物なり。(下略)(八一頁)

十一 伊太利

アペニン山脈・ベスピヤス火山・エトナ火山(八三頁)
オリーブ・葡萄等を産し、オリーブ油・葡萄酒の製造行は
る。(八四頁)

十二 バルカン半島

本洲は赤道の南北に亘りて大部分熱帯にあるが故に、一
般に氣候甚だ暑くして象・獅子・犀・シラフ・駝鳥・河馬・鸚
等の動物多し。

第四 阿弗利加洲

中部には降雨多くして大森林をなせる所多けれども、これより南又は北に至るに随ひ、雨量次第に減じて、草原又は沙漠をなし、住民少し。殊に北部のサハラ沙漠は其の面積本洲の約二割を占め、荒涼寂寞にして、唯オアシスに泉水湧き出でて植物の繁茂せるを、少數の住民あるを見るのみ。隊商は駱駝に乗り、オアシスをたどりて、貿易に従事す。其の交通の困難一方ならず。(一九一頁―九二頁)

第五 北亞米利加洲

一 總論

ロッキート山脈・アパラチヤ山脈(九八頁)

西海岸の山地及び東北部地方には、森林多くして林産物に富み、又野生の獸類少からず。(下略)(一〇〇頁)

二 加奈陀

北部は寒氣極めて烈しくして凍原をなせるが故に、産業の見るべきものなけれども、南部一帯の地方は農業・牧畜盛に行はれ、林産物・礦産物にも富む。されば製粉・製材・製練・製紙等の工業、水力を利用して頗る發達し。(下略)(一〇三頁―一〇四頁)

首府オッタワはセントローレンス河の支流に臨み、木材の集散盛なり。(中略)バンクバーは太平洋航路の主要なる港にして、我が國の諸港と定期の航路を通じ、我が國よりは絹織物・茶等を輸入し、我が國へはバルブ・木材・鐵を輸出す。(下略)(一〇四頁―一〇六頁)

三 亞米利加合衆國

(本項には林業に關する記事なきも合衆國の林業、殊に木材は我邦に最も關係深きものなるを以て、特に解説を要す)

四 墨西哥・中央亞米利加諸國

(挿繪―墨西哥高原の景)(一一二頁)

第六 南亞米利加洲

アンデス山脈(一一四頁)

本洲は大部分熱帯中にあるを以て、一般に氣温高く、又雨多くして植物よく生育し、殊にアマゾン河の流域には大森林あり。本洲は珈琲・カカオ・ゴム等を産すること多く、(下略)(一一四頁)

伯刺西爾は(中略)西北部たるアマゾン河の流域は暑き烈しくして、雨多く、到る處に森林ありて、ゴムを産すれども、住民甚だ稀なり。されど東南部は氣候温和にして

土地よく開け、珈琲・砂糖・カカオ等を産すること多し。

殊に珈琲は其の産額世界第一に位す。サンパウロは珈琲産地の中心市場として著れ、サントス港は珈琲の輸出多きを以て知らる。(中略)此の國の東南部には、近時我が國人の移住して珈琲の栽培に従事するもの少からず。(一八頁)

(挿繪―アマゾン河畔の森林)(一一八頁)

●高等小學地理書 卷二

第五 大氣

三 雨

(上略)雨量は地勢・森林・海流・氣温・風等の影響によりて各地一様ならず。(三三頁)

第六 生物の分布

生物は水中のものも陸上のものも大いに其の種類を異にす。又水中のものは水の性質・深淺等により、陸上のものは地勢・風土等によりて、其の分布一様ならず。されば赤道地方より兩極地方に進むに従ひ、又低地より高地に上るに隨ひて、生物は漸次其の種類・生活狀態等を異にす。その他、乾燥地と濕潤地と、大陸と島嶼とに於て

も亦其の趣各々同じからず。

(植物の分布)熱帯の中にて多濕の地には、植物の種類頗る多く、且其の生育甚だ盛にして、喬木・大樹の雲を凌ぎ枝を交へ、寄生植物之に著生し、蔓生植物之に纏繞して、晝尙暗き大森林をなせるもの少からず。かくの如きはアマゾン河の流域地方、亞細亞の南部より東南部に亘れる地方、阿弗利加の中部地方等に多く見る所なり。平地には椰子樹盛に繁茂し、又諸所に甘蔗・珈琲・稻・綿等の農作物盛に栽培せられ、バナナ・パイナップル等の如き美味の果實に富む。海岸にはマングローブ樹の密林をなせるもの多し。

溫帯地方にては麥・稻・茶・桑等の農作物を栽培し、松・杉・檜等の森林を養成し、花の美麗なるもの、果實の美味なるものを培養す。

溫熱兩帯は植物の生育概して盛なれども、往々大氣の乾燥甚たしきが爲に、大沙漠をなせる所あり。サハラは其の最も著しき例なり。又一年の中、乾燥季には不毛の地となり、降雨の季には綠野に變ずる所あり。蒙古及び中亞細亞の草原、南米南部の草原等即ち是なり。

寒帯地方にありては植物甚だ少く、其發育亦良好ならず殊に西北利亞・加奈陀等に於ける凍原の如きは、夏季に

於て僅かに蕨類・地衣類の生ずるを見るのみ。(三六一—三八頁)

(我が國に於ける植物の分布)我が國は地勢變化に富み、風土、所によりて一様ならざるが故に、植物は其の種類甚だ多く、隨つて所によりて、其の景觀を異にす。臺灣・琉球列島等には、がじまる・バナナ・あだん・へこ等多く成長し、臺灣の山地、九州・四國及び本州には松・杉・檜等の森林多く、朝鮮には、から松・もみ等多く、北海道・樺太にはとど松・えぞ松・から松等の森林あり。(下略)(四一頁)

(挿繪—本邦の熱帯植物—がじまる・へこ・あだんの圖)

第十一 産業 一

(世界の林業) 森林には天然林と人造林とあり。天然林の廣大なるものは熱帯多濕の地及び露國・加奈陀・米國等の諸地方に多し。人造林は獨逸・チエッコスロバキヤ等の諸地方に多し。森林よりは木材・燃料を初め、果實・菌類等の食料品・工藝品の原料・藥品等を出すに少からず。(我が國の林業) 我が國には長野・岐阜・秋田・青森・奈良の諸縣・臺灣の東部、北海道・樺太及び朝鮮の北部に大なる森林あり。木材・薪炭等の林産物は内地のみにも年産價額二億五千萬圓を超え、朝鮮・臺灣に於ても近年

産額大いに増加せり。(六六頁)

第十二 産業 二

(我が國の貿易) (上略)輸出品中最も主要なるものは生絲にして、(中略)之に次ぐは綿織物・絹絲・絹織物・石炭・紙及び紙製品・陶磁器・砂糖・メリヤスにして、更に之に次ぐは茶・水産製造物・マツ子・樟腦等なり。輸入品中、最も主要なるものは綿織物にして其の年輸入額は我が國の年總輸入額の約二割二分に及ぶ。鐵及び鐵製品之に次ぎ、機械類・豆粕・木材・砂糖・米小麥・羊毛・織物等の輸入額亦少からず。(七五頁—七六頁)

昭和七年十二月十一日印刷
昭和七年十二月廿五日發行

(定價 金拾錢)

發賣所

東京市赤坂區
溜池町一帯地

大日本山林會

電話赤坂(48)一六七番
振替東京五七九二番

東京市赤坂區溜池町一帯地
大日本山林會内
編輯兼發行者 宮田長次郎
東京市赤坂區溜池町一帯地
發行所 法人大日本山林會
東京市牛込區市谷台町二十二番地
印刷者 甲田藤太郎

所刷印堂武成

263
367

終